

---

# 魔法少女リリカルなのは ～複製と複製のフェイカー～

フィリエ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ー複製と複製のフェイカーー

### 【Nコード】

N8091M

### 【作者名】

フィリエ

### 【あらすじ】

朝、俺は電車に乗っていた。しかし、いきなり目の前が真っ暗になっってしまう。気がついた俺は神様を名乗る青年に出会う。

作者は完全な初心者です。至らない点ばかりだと思いますが、どうぞよろしく願います。

なお、この小説は作者の妄想が多く含まれているため、キャラの口調がおかしい場合がありますが、ご了承ください。

## プロローグ（前書き）

駄文です。ご了承ください。

## ブローグ

ピンポンパンポン

「間もなく、13番線に、行きが、六両編成で到着します。黄色い線の内側に、お下がりください。」

俺はその電車に乗り込む。乗り込むと同時に電車のドアが閉まり、発車する。電車に揺られながら、今現在の時間を確認する。時刻は8時5分。これなら学校には間に合う。

そう思った瞬間。

俺の目の前は一瞬で真っ暗になった……。

「ここは・・・？俺はいつたい・・・？」

「やあ、ようやくお目覚めかい？」

目を開けてみると、そこには20代半ばの青年が俺の顔を覗き込んでいた。

「おわっ！」

「そんなに驚かなくても・・・」

「いやいや、誰だって驚くから。ところでここどこ？アンタは誰だ？」

「まあまあ、落ち着いて。まず、ここは天界。私は・・・そうだね、君たちの言うところの神様、かな？」

「なんで疑問形！？てか神様なのか！？」

「そうだよ。ほかに質問は？」

「えーっと、俺はなんでここにいるんだ？」

「ありや？覚えてないの？」

「ええ、残念ながら全く」

「そういえば記憶が全く無い。俺は・・・誰だ？」

「あらー、記憶障害ですか。じゃあお教えしましょう。貴方は列車

事故で死んだんですよ」

「な……、そうか……。俺はこれからどうなるんだ？」

「……………逆に聞こう。お前はどっしたい？」

ッ！なんだ？急に雰囲気が変わった！？

「お、俺は」

そんなこと、急に言われてもわからない。

「なんだ。てつきりすぐに元の世界に戻してくれ、などと言っのか  
と思っただけなのか？」

元の世界？

なんだ？

元？

世界？

ソナモノ俺は知らない。

「ああ、そうか。記憶障害だったな。……………しかたない、お前  
に選択肢を与えよう」

「選………択肢？」

「そうだ。ここで永遠にさまよい続けるか、新しい人生を受けなおすか、だ。もつとも、答えは出ているようなものだがな」

さまよう・・・？永遠に？ここで？・・・それでもいいかもしれない。新しい人生なんて、もう要らない。俺は疲れたんだ。何もかもに。もう、いいんだ。俺はもう

いのか？

ッ！な、なんだ・・・？これは・・・声？

いいのか？

どこだ！？どこから聞こえるんだ！？

それでいいのか？

やめろ！やめてくれ！もういいんだ！俺はこのまま

本当にそれでいいのか？

瞬間、体に電撃が走る。つづいて頭の中にいろいろなものが直接浮かび上がる。これは・・・俺の記憶！？

「思い・・・出した・・・」

「ほう、自力で思い出すとは。で、どうするかね？」

そんなもの決まっている。俺は

「新しい人生を歩む！」

「そうこなくては！実際にいい目をしている。さっきまでとは大違いだ」

全部思い出したからな。もうあの世界に興味はない！

「よかるう、選別だ。5つまでお前の願い、叶えよう」

太っ腹だな、この神様。

「その前に聞こう。俺はどこへ飛ばされるんだ？」

「ふむ、教えてなかったな。リリカルなのはの世界だ」

なのはってーと・・・あれか！魔砲少女！あれ？なんか違ったかな？

「なるほど。じゃあ願いを言うぜ？1つ、身体能力の最大強化と魔力量SSSランク以上」

「ほう。いきなりチートだが、いいだろう。だが、魔力量に関しては枷をつけよう。さすがにこれでは強すぎるのでね」

「・・・わかった。あまり重いのは勘弁してほしいが」

「そうだな・・・。魔力を放出すると暴走する、でいいか？」

「それぐらいならなんとかなるな」



「承った。では、次だ」

「2つ目。さっきの枷の攻略としてユニゾンデバイスを二体用意してくれ」

「枷の攻略？ いったいどうやって？」

「ユニゾンして俺の魔力を抑えてもらうのさ」

「なるほど、そういうことか。叶えよう。残りは3つだ」

「3つ目だ。アルファ・ステイグマ複写眼がほしい。無論、暴走は無しだ」

「ここで伝勇伝とは。いやはや、恐れ入ったよ、君の強欲さには」

伝説の勇者の伝説知ってんのかよ！ それに強欲じゃねえ！

「5つかなえてくれるって言われたんだから、叶えてもらわないともつたないだろ？」

「ふむ、確かに。私が言い出したことでもあるからな。続けたまえ」

「4つ目。レアスキル希少能力として無限の剣製が使えるようにしてほしい」

「宝具まで使うか。・・・よろう、投影もサービ天界スで使えるようにしておく。宝具はここにあるものだけなら投影できるだろう。もちろん、真名も解放できる」

「宝具までか。ありがとさん」

「ふつ。さあ、最後の願いだ」

「最後なんだが、俺が願ったときに一回だけ力を貸してくれないか？」

「何？・・・いや、なるほどな。ここまで神をこき使うとは面白い！よからう！ただし、一回だけだぞ？」

「おう、それで十分だ。ありがとな！」

「礼を言われる筋合いはない。では、そろそろ時間だな。さあ、道は開かれた！後はお前の自由だ。」

「ああ、行ってくるぜ」

そうやってその場で反転、一歩踏み出した。

「喜べ少年。お前の願いはようやく叶う。」

「ん？なんか言ったか……つてええええええええ！？」

踏み出した先には、足場がなかった。簡単に言くと穴が開いていた。

「こんのクソ神がああああ！覚えとけよ！！」

俺は奈落の底へと落ちて行った……。



## プロローグ（後書き）

と、いうわけでプロローグをお送りしました。

書いててもうなにがなんだがわからなくなつて大変でした。

ですが、これからよりよい小説にしていこうと思いますので、応援等よろしく願います。

## 第一話（前書き）

相変わらずの駄文です。それでもいいという人はどうぞ。

## 第一話

てください。

なんだ？俺はまだ眠っていたい。邪魔しないでくれ。

きてください。

透き通るような声。誰だ？俺はこんな声知らない。

起きてください。

はっきりと聞こえる。でも、嫌だ。もう少し、眠りたい。

起きろって言うてるでしょ！

「うおお！なんだ！？敵襲か！？」

びっくりして飛び起きる。せっかく寝つけると思ったのに……。

「やっと起きましたね、マスター」

「やれやれ、やっと起きたのかい？なんとも、寝ばすけなマスターだな」

声がしたほうへ顔を向けると、そこには二人の女性が立っていた。一人は見た目10代後半の燃えるような赤髪の女性で、もう一人も見た目10代の綺麗な銀髪の女性だった。

「・・・・・・・・・・誰？」

「ちょ、ちよつと酷くないかい？あたしはアンタに呼ばれたから来たつてのに」

「まあまあ、初対面だし仕方がないよ。ね、マスター？」

いまいち状況が飲み込めないが、わかったことがある。赤髪の女性は口が悪く、銀髪の女性は丁寧な口調であることと、俺をマスターと呼ぶこと。もしかして彼女たちは・・・・・・・・。

「なあ、お前らつてひょつとしてユニゾンデバイス・・・なのか？」

「ご明察。さすがは私のマスターですね」

「へえ、ちよつとは考える頭があるみたいだな」

若干1名にボロクソに言われてるな。俺の心のライフポイントはゼロよ！とでも言うべきか。

「えーつと・・・名前。名前はあるのか？」

「いいえ。私たちは生まれたてのデバイスですから」

「じゃあ俺が決めてもいいか？」

「もちろんです。マスターは貴方だけですから」

「あんまり変な名前付けたらブツ飛ばすぞ！」

怖ええよ！しかたない、なにか適当な名前を……。

「そうだな。シアとレン、なんてどうだ？赤髪、お前がレンな」

「赤髪言つな！でも、名前のセンスはまあまああってどこか」

「またそんなこと言って。気に入ってるんでしょ？」

「なッ！そ……そんなわけないだろ！？」

レンってツンデレなのか？てかシアってイジる側だったんだ……。

「あゝ、はいはい。落ち着けて。ゴホン。じゃあシア、レン。これからよろしく頼むよ」

「「了解イエス、マイロードしました、我が主」」

「あんまり堅苦しくなくてもいいからね？」

「わかりました。ところで、マスターの名前を伺ってないのですが……」

あゝ、そついやそうだったな。でも、前世のは使いたくないし……

「俺か？俺は……和麻。ひいらぎかすま柊和麻だ。呼び方は……好きに呼んでくれ」

「「じゃあ和麻で」」

「そこだけ息ピッタリだなオイ！……まあいい。今すぐユニゾン



できるか？」

「もちろんです。融合事故なんて起こしませんよ？」

「なんたつて特注だからな、あたしらは」

「それもそうだな。じゃあ行くぞ！『クロス・イン』！」

とたんに俺は光に包まれる。温かな光。そんな中、頭に声が響く。

（マスター、聞こえますか？）

「なっ……、シア！？どこだ！？」

（マスター。焦らずに言いたいことを心に思い浮かべてください）

（え、えと……。こうか？）

（ええ、大丈夫です。それではマスター、バリアジャケットの構築をお願いします）

（どうすりゃいいんだ？）

（これもイメージして思い浮かべるだけでOKです）

（えーと、じゃあこれで！）

思い浮かべたのは、黒地のＴシャツに黒のジーパン、それに地面につきそうなほどの長さのコート。もちろんコートも黒。黒大好きだからね、俺。

（了解。バリアジャケット認識中……完了。構築中……  
・構築完了）

すると、イメージした通りの格好になる。便利だな、魔法って。

（構築完了しました。……マスター、黒一色はどうかと。それにそのコートでは動きにくいですか？）

（いいんだよ、これで。……ところで今がいつかわかるか？知識は俺の記憶からでも引っ張ってきてくれ）

（少々お待ちを。……現在は無印、ですか？の冒頭ですね。どうやら今夜、なのは嬢が魔法少女になるようです）

無印か、よかった。友達から勧められて見てただけだから、A'sまでしか知らないんだよね……。

（ふむふむ。じゃあ仕掛けるなら今夜か。あ、それとレンはどこいった？）

（レンは基本的にユニゾンした時には喋りません。マスターの機嫌を損ねかねませんから）

（なるほどね。じゃあそろそろ行くのか。あ、リミッターは6つかけてAまで落としてね。それと、念話は周りに人がいる時だけにするから）

（了解しました。……ところで行くのはどちらへ？）

「決まってるだろ？翠屋だよ」

Sideなのは

ふえ！？は、はじめまして。私立聖祥大学付属小学校3年の高町なのはです。今、私はお父さんとお母さんのお店である喫茶店「翠屋」でお手伝いをしています。

「いらつしゃいませー！」

入ってきたのは私と同じくらいの年の子でした。しかも冬でもないのに真つ黒なコートを着ていました。暑くないのかな？

「一人だけど、カウンターの近く空いてる？」

「はい、ご案内します」

私はお客さんをカウンター席に連れて行き、メニューを渡しました。

「んー、どれもおいしそうだな……。じゃあ、シュークリーム3つとコーヒーお願いします」

「はい。シュークリーム3つとコーヒーですね。しばらくお待ちください」

私と同じくらいなのにコーヒー飲むんだ……。私は絶対に飲めないの。さあ、早くお母さんに注文を伝えないと！

「へえ、君                      コーヒー                      なんだ」

「ええ、これ                      ふつう                      すよ？」

「お                      だねえ。と                      で、きよ                      きみひ                      」

カウンターでお父さんとあの子がなにかお話してるの。なにを話してるんだろう。

S i d e   o u t

俺は翠屋に一步入った瞬間硬直した。まさか、未来の魔王にいきなりエンカウントするとは思ってもみなかったからな。落ち着け、俺。平常心、平常心。

「一人だけど、カウンターの近く空いてる？」

カウンターの近くにしたのは土郎さんと話ができるかもしれないから。交友関係はちゃんと広げておかないとね。

「はい、ご案内します」

なのは案内の元、俺はカウンター席についてメニューを広げた。くっ、どれを選べばいいんだ！なんて思いつつ、一回でいいから食べてみたかったモノを注文する。

「ん〜、どれもおいしそうだな……。じゃあ、シュークリーム3つとコーヒーお願いします」

実は俺、シュークリームが大好きだったりする。こらそこ、子供っぽいと言っな！

「はい。シュークリーム3つとコーヒーですね。しばらくお待ちください」

そう言ってなのは奥へと引っ込んだ。さて、そろそろ……。

「へえ、君はもうコーヒーも飲めるんだ」

ほらきた。実はコーヒーを頼んだのはこの為。つまり、土郎さん側からこつちに声をかけるように仕向けたわけ。子供が一人で店に来て、なおかつコーヒーなんて頼んでるの見たら誰だって声をかけると思う。

今回はそれを利用させてもらったのさ。

「ええ、これくらいなら普通に飲めますよ？」

だって17ですし。体は9歳だけど。

「大人だねえ。ところで、今日は君一人なのかい？」

親いないからね。

「はい、そうです。あ、それと俺のことは和麻でいいですよ」

「和麻君か。僕は土郎、高町土郎だ。よろしく」

「はい、よろしく願います。土郎さん」

そうして、しばらく土郎さんと話をしていると、俺が注文したものを持ったのはと桃子さんがこちらへやってきた。

「はい、お待ちどう様」

「あ、どうも。ありがとうございます」

とりあえず一口。………ウマー！！いい、今までに食べたことのない味だ。

「お、美味しい………」

「あら、ありがとう。貴方のお名前は？」

「ふあい？……ごっくん。柊和麻です」

「和麻君ね。年はいくつ？」

「9歳です。」

「あら、なのはと同じ年ね。なのは、自己紹介はもうした？」

「まだしてないよ」

「なら丁度いいわ。なのは、和麻君に自己紹介しなさい」

しなくても全部知ってますよー。言わないけど。言ったら後が怖い。

「えと、高町なのはです。」

「俺は柊和麻。和麻でいい。」

「じゃあ私もなのはって呼び捨てでいいよ」

「そうか。じゃあよろしくな、なのは」

「うんっ！」

ゾクッ！

「!？」

「？ 和麻君どうしたの？」

この殺気は・・・恭也さんしかないよね。

「いや、なんでもない。ごちそうさま、美味しかったよ」

これ以上ここにいたらヤバイ。主に命とか。

「ふえ、もう行っちゃうの？」

ぐつつ。そんな眼で見ないで！理性が、理性がああああ。

「また近いうちに会えるよ、絶対」

「うん・・・」

まあ今夜ですが。

「あら、もう行くの？」

「はい。また来させてもらいますね」

「ええ、待ってるわ」

「では、ごちそうさまでした」

会計を終えて、外に出る。あつぶね、もう少しで戦闘フラグ立つとこだった……。さて、夜まで暇だな。人の来ないところで少し投影の練習でもしておきますかねえ。





## 第一話（後書き）

どうも、作者です。今回はデバイスとなのはとのファーストコンタクトを少し書いてみました。

原作への介入は次からになります。ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

## 無印設定（前書き）

連載はじまったばかりですが、設定をお送りいたします。

## 無印設定

作「どうも、作者です」

和麻「どうも、主人公の和麻です」

作「さっそくですが、ステータスの発表に行きたいと思います」

和麻「それはいいんだけどさ。俺魔法何も知らないのに大丈夫なのか？」

作「お前複写眼もってんだろ？ラーニング<sup>learning</sup>すればいいんだよ！」

和麻「あ、コラ！勝手にFFの用語使っじゃねえ」

作「こまけえこたぁいいんだよ！」

和麻「つたく、こいつは……。まあいい。これが俺のステータスだ」

名前：柊<sup>ひいらぎ</sup>和麻<sup>かずま</sup>

年齢：179

Fate風ステータス

筋力：A+

耐久：A

敏捷：A+

魔力：E X

幸運：D

宝具：E↗E X

スキル

投影魔術：ランクE↗E X

グラデーション・エア。自己のイメージからそれに沿ったオリジナルの鏡像を魔力によって複製する魔術。

イメージが自分の中で完璧でなければ投影はできない。ゆえに投影で生み出したものは自己のイメージどおりの強度をもち、術者の知識が本物に近いほど現実においても完璧になる。

なお、なのはの世界には宝具は存在しないため、投影した物はランクは下がらず、破棄しない限り半永久的に存在し、真名開放もできる。

複写眼：ランクA++

全ての魔法の構成を読み取り、すぐさまそれを自分のものとして使用できるという能力を持つ。

この眼は暴走することはない。

希少能力  
レアスキル

無限の剣製：E↗E X

アンリミテッドブレイドワークス。全ての剣を形成する要素があり、オリジナルを見た事があれば容易く複製できる。なお結界形成時に用意されている武装は結界形成から維持まで魔力を消費し続ける。一度複製した武具は結界内に登録され、固有結界を起動させずとも投影魔術として作り出せる。

デバイス

シア&レン：魔導師ランクA A

神様からもらったデバイス。一見ただのユニゾンデバイスに見える

が、実はさらなる能力を持っている。  
シアは礼儀正しく、レンは口が悪い。

和麻「俺が言うのもなんだがチートすぎじゃね?」

作「そうだね。」

和麻「ところで作者」

作「なんだ?」

和麻「F a t eのランクをなのはに当てはめるとどうなるんだ?」

作「んゝ、そうだね……。だいたい、

F a t e            なのは

E X            S S S

A            S -

B            A A

C            A

D            B

E            C

って感じか?」

和麻「対魔力も欲しかったな」

作「ちょっとは自重しろよ」

和麻「自重？知らねえなあ！」

作「こ、コイツは……」

和麻「まあ、落ち着け。ハゲるぞ？」

作「お前の所為だ！」

和麻「やれやれ、作者よ。こんなところで漫才をしている場合か？そろそろ挨拶して締めるべきではないかね？」

作「お前が原因だろうが！……ゴホン。え、ステータスに関してはこんなところですよ。激しく厨二ですがこれからもうろしくお願います！」

## 無印設定（後書き）

主人公のステータスでした。てか、設定でさえも駄文ですね・・・。  
。見てくださった方に感謝したいと思います。

意見等ございましたら感想をください。これからの執筆の糧とさせていただきます。



## 第二話（前書き）

作者「第二話をお送りします」

和麻「なんだ？意外と早いな」

作者「夏休みだからね」

和麻「ああ、なるほどな」

作者「それでは、始まります」

## 第二話

翠屋を後にした俺は、夜になるまで海鳴市を歩きまわった。本当は投影やらの練習をする予定だったんだけど、シアが散策を提案したのだ。

「あゝ、足だりい」

（お疲れ様です、マスター）

「意外と広いのね、この街」

（そうですね）

「さっさと帰って寝たい……あれ？」

（マスター、どうしました？）

「いや、今気がついたんだけどさ。俺、どこに住めばいいんだ……」

（……………）

「あれ！？シアさん！？」

（……………頑張ってください）

「ちょ、待て待て！マスターのピンチなんだよ！？なんか案とかないの！？」

（まあ、なるようになるでしょう）

「・・・はあ。先が思いやられるよ」

なーんてことを話しながらうろつろしてたらいつの間にか夜に。  
ホント今日の宿どうしょ・・・。

（マスター？そろそろ用意をしておいてくださいよ？）

「わかってるよ。お前は俺の母親か。全く・・・ッ！」

（マスター！魔力反応です！）

「場所を特定！ナビ頼むぞ！」

（了解！）

俺はシアが頭の中に浮かび上がらせた地図をもとに、走り出す。  
・・・結構遠いな。移動術なんかがあれば楽なだけだな。

（マスター、ないものねだりをしてても仕方ないですよ？）

「わーってるよ！」

心に思っただけで伝わるのはちょっと問題だな。改良しないと。

（マスター、次の角を曲がったらすぐです！）

「あいよ。」

角を曲がった俺が見たものは、化け物とそれに追いつめられてる少女。<sup>のは</sup>

「あれヤバくない？俺の目が正しかったらレイジングハート起動してすらないよね？」

（マスターの目は正常かと。あ、化け物が攻撃態勢に入りました。）

「サラッと言っなよ！？チツ、間に合えよ！」

急いでなのはと化け物の間に割って入る。

（よし、シア！リミッターを1段階リリース！魔力をランクAAで放出、障壁展開！）

（了解！リミットリリース！ランクAAで展開！）

化け物に向けて右手をパーの状態で突き出す。化け物の攻撃は俺の張った障壁によって阻まれる。あれ？プロテクションいらなくね？

「ふえ！？だ、誰？」

「話は後だ。今はお前にしかできないことをやれ！」

「う、うん。あれ？どこかで聞いた声なの……」

さて、と。なのはが変身するまでは俺があいつの相手をするかな。

「さあ、化け物よ。相手は俺だ！心してかかってこい。投影、開始」<sup>トレス、オン</sup>

！」

初めての投影だが、なかなかうまくいったじゃないか。よし、戦闘開始と行きますか！

「我、使命を受けしものなり 契約の元その力を解き放て 風は空に、星は天に そして不屈の魂はこの胸に この手に魔法を レイジングハートセットアップ！」

《スタンバイレディ、セットアップ》

干将・莫耶を投影し、しばらく時間を稼いでいると、背後から、レイジングハートを起動する声が聞こえてきた。よしよし、俺の順番も終わりだな。干将・莫耶を化け物に向かって投げて、と。

ブロックンファンタズム  
「壊れた幻想」

投げた双剣は化け物に刺さり、爆発する。煙がはれると、動かなくなっただけの物だ。

「いまだよ、なのは！」

「うん！リリカルマジカル！ジュエルシード封印！」

さて、封印も終わったことだし、撤収するのでしょうか。

（シア、撤収するぞ）

（挨拶はしなくてよろしいのですか？）

（あっちはまだ気づいてないからな。逃げるんなら今のうちだろ？）

（……まあ、そうですね。わかりました。撤収しましょう）

さて、なのはたちあちらさんが気づく前に逃げよ」あ！待ってなの！」「ちいっ！

「……何か用か？」

「う……。あ、あの、ありがとうございました」

あり？もしかして俺だって気づいてない？

（ちょうど街灯が壊れましたからね。おそらく暗くてわからないのでしょっ）

なるほど。そりゃ好都合つてもんだな。

「気にするな。礼を言われるようなことはしていない」

「で、でも、助けてくれたし・・・」

「だからいいと言っている。・・・そろそろここから離れないとまずいな」

「え？」

「周りを見る。じきに警察が来るぞ？」

周りは酷いありさまだ。・・・まあ、原因は俺と化け物のせいだが。だって、化け物が縦横無尽に動き回るんだもの。俺は悪くないやい！

「は、早くどうにかしないと！」

「・・・じゃあ俺は行くから。気をつけて帰れよ？」

「え？行くつてどこへ？」

「家・・・と言いたいが、あいにくそんなものは無いのでね。今夜は野宿かな」

「ええ！？ダ、ダメなの！風邪ひいちゃうの！」

「そうは言われても、無いものは無いんだから仕方ないんだがな」

まあ、野宿は覚悟してたからいいんだけどさ。

「じゃ、じゃあ、私の家にくればいいの!」

あちゃー、また断りにくいことになったなあ……。

「い、いや……え」と。ほ、ほら! 見ず知らずの人を簡単に泊めるわけにはいかないでしょ?」

「私の家は大丈夫なの!」

ですよねえコンチクショウ! 土郎さんやら桃子さんが聞いたら「泊めてもいいよ」とか言うに決まってるよね。」

「え、いや、あの、ええと……。やっぱり遠慮しまおわああああああ!」

痛ててて……。なんでこんな時に空き缶!? あれか!? 運がLUCK低いからなのか!?

「だ、大丈夫?……え、和麻……君?」

ちようど転んで着地したところが、街灯がついてるところで、見事なのはさんにバレることになりました。……ふ、不幸だああああああ!!



あれから起こったことを話そうか。顔がなのはにバレた俺は、なのはに半ば強制的に翠屋へ連れて行かれた。翠屋へ帰ったなのはは夜遅くに外出したことを怒られ、俺はなぜか歓迎された。で、部屋割りなんだが……。

「じゃあ、後は和麻君の部屋だね」

「桃子さ「はい！私の部屋がいいの！」ちょっと待て！」

「あら、それはいいわね。じゃあ和麻君はなのはの部屋ね」

「だから待てと！てか桃子さん！俺は男ですよ！？いいんですか？自分の娘の部屋に泊めて」

「いいのよ。それになのはも嬉しそうにしてるでしょう？」

「お、お母さん！／＼／」

「あらあら。なのはっいたらもしかして……」

「おお、なのちゃんにもついに春が来たのか……。羨ましいなあ」

「にゃあああああ！？ち、違うもん！／＼／」

なんともまあ、騒がしい家族だな。でも……悪くない。そう思っている、不意に後ろから声をかけられる。

「お前になのはは渡さん！」

振り返ってみれば、恭也さんが仁王立ちして、俺に殺気をぶつけていた。こええ。

「大丈夫です。そんなことしませんよ」

「それが本当ならいいんだがな」

相変わらず殺気全開の恭也さん。殺気って痛いんだね。

「じゃあ、和麻君。お部屋に行こっ?」

「ん?ああ。じゃあ高町家のみなさん。しばらくお世話になります」

「「「「「ようこそ、高町家へ」「」「」」」」

こうして、俺はしばらく高町家にお世話になることが決まった。

「・・・で、部屋についたわけなんだが」

「どうしたの?」

「いや、なんでもない。とりあえず今日はもう休もう。なのはも疲れただろ?」

「うん、そうだね」

「話は明日でもできるからな。じゃあお休み」

一連の会話をしながら床に布団を敷き、

「和麻君も一緒に寝るの！」

「へ？」

今……なんて？

「だから、一緒に寝るの！」

「待て。一緒に寝るっていうのは、そのベッドでか？」

「うん」

「えーっと、その、勘弁してほしいな、なんて」

「拒否権は無いの！」

「え、ちょ、ちょっと待て！や、やめろおおおおお！！」

なのはってこんなにアグレッシブだったのか……。俺、この先大丈夫かな……。あ、ちなみに俺はあの後どうにかなのはを説得して、床で寝ることになりました。

寝る前にいくつか聞いておきたいことがあったんだ。シアまだ起きてるかな？

（なあシア？）

（なんですか？）

（起きてたか。いくつか聞いてもいいか？）

（ええ、なんなりと。あ、スリーサイズはダメですよ？）

（聞かねえよ！なにが悲しくてお前らのサイズきかんにゃなんのだ！）

（冗談ですよ。で、聞きたいことは？）

（つつく。まず1つ目だが、デバイスが無い俺にはジュエルシードの封印はできないのか？）

（できないことはないですが、負担がかかりますね。デバイスの補助が無いんですから）

（お前らじゃどうにもならないのか？）

（残念ながら無理です）

（そうか・・・、じゃあ2つ目。俺はこれからどうしたらいいと思う？）

（そうですね・・・。当分はなのはさんと一緒に行動してジュエルシード集め。それから期を見ていろいろと介入して、最後はハッピーエンドって感じが一番ですね）

（そうか）。じゃあそれを基本方針でやろっか。うまくいけば、だけど。）

（そうですね。ですが、マスターはやるんでしょう？）

（もちろん。お前らも頼りにしてるからな）

（ええ、十分に頼ってくださいね？）

（ははっ、ありがと。じゃあそろそろ寝るわ）

（はい、お休みなさい。マスター）

念話を切った後も、俺はこれからのことについて考えを巡らせていた。それは、俺が眠りに落ちる一瞬前まで続いた・・・。



## 第二話（後書き）

和麻「おい作者」

作者「なんだ？」

和麻「戦闘シーンなんでカットしたんだ？」

作者「いや、いらなかな〜と思って」

和麻「いいのかそれで・・・」

作者「次はもちろんちゃんと書くよ？」

和麻「そうしてくれ。それと、話を省略しすぎじゃないか？」

作者「だって・・・原作うる覚えなんだもん・・・」

和麻「オイ！」

作者「ちゃんと原作見直さないと・・・」

和麻「しっかりしてくれよ」

作者「了解」

和麻「では、また次回」

作者「最後に、このような駄文を読んでもうださった皆様に感謝を」

### 第三話（前書き）

作者「……orz」

和麻「どうした？」

作者「戦闘シーンが……書けん！」

和麻「いばってんじゃねえ！」

作者「と、言うわけで今回も戦闘0ですがよろしくお願いします」



### 第三話

夢を見ていた。

それは、俺がまだ                      と名乗っていたころ

変わることもない日常。刺激のない、退屈な生活

ふと、それが懐かしいと感じる

なぜ？                      わからない

もしかしたら、俺は戻りたいのかもしれない

あの穏やかだった世界へ<sup>「じやうじやう」</sup>

これから俺を待ち受ける”何か”に体が拒否しているのかもしれない

『これ以上かかると危ない』

だけど、俺は決めたんだ

やれるだけやるって決めたんだ

もう逃げないって、決めたんだ！

日の光が部屋へと差し込む。俺は眩しくて目を覚ます。

「なんだ・・・？なんか夢を見ていたような・・・」

なんだっただろうか。気になるが、思い出せない。まあ、夢だし、仕方ないな。

（おはようございます、マスター）

（ああ、おはよう）

シアと挨拶をして、俺は起き上が・・・れなかった。原因は言わずもがな、なのはである。いつの間にかベッドから俺の寝ていた布団まで移動してやがる。腕をがちりホールドするおまけ付きだな！

（・・・ハア。シア、どうしたらいいと思う？）

（・・・放っておいたらいかがですか？）

（それだと俺が起き上がれないじゃん）

(じゃあ起きるまで待つのはどうです?)

(それもあるなあ……。仕方ない、起こすか)

俺は仰向けだった体を横にして、なのはの頬をつつく。おゝ、柔らかい。

「ふにゅ……。ううん……。」

起きる気配ゼロかよ……。じゃあ何してやろうかな……。ッ  
！視線を感じる！？後ろか！俺は首だけ回して後ろを見る。そして俺が目にしたものは……。

ニヤニヤしながらこちらを見ている、桃子さんと美由希さんだった。

「なのはったら、大胆ね」

「ホントだよ」

「う・う・う・／／／」

あの後、なのはを起こし、先に着替えさせた後に、俺も着替えて一階のリビングに降りると、イジられて顔を真っ赤にしていた。でも、あながちまんざらでもないという顔をしているような気がする。

一方、男性陣は俺がリビングに入ってくるなり強烈な殺気を放ってきた。おいおい……。一般人なら気絶するレベルだぞこれ……。

「和麻君、ちよつと道場までいいかな？」

「和麻……お前を殺す！」

ちょ、怖っ！てか、恭也さん、中の人ネタはダメだってば！

「ちよつ、まつ、やめてえええええええ！」

俺の声は、むなく響くだけだった……。

「さあ、構えろ！」

「今回は、僕も参加させてもらおうよ」

子供相手に2：1かよ。しかも俺、剣技なんて知らないのに・・・。  
仕方ないな、降りかかる火の粉は払わないと。

「・・・・・・・・わかりました。行きます！」

俺は渡された二振りの木刀を持ち、構える。今ここに、御神流vs  
俺の戦いが幕を開けた。・・・・・・・・負けフラグですね、わかります。

結果から言うと、負けた。まあ、御神流に勝てるなんて思ってもいなかったよ？あ、でも恭也さんは倒せたからよしとしておこう。ちなみに俺は、恭也さんを倒したスキを狙われてあえなく撃沈。気絶という強制睡眠に追いやられた。

（マスター）

（なんだ？シア。てか、気絶中でも念話はできるんだな）

（ユニゾンしてる時だけですけどね。それよりマスター、さっきの試合見てましたよ？）

（見てたのかよ……。あまり感想は聞きたくないな）

（あまり気を落とさずに。マスターは魔導師であって剣士ではないんですから）

（まあ……。そうだけどさ）

（ならば、いつまでノビているのですか？マスターは自分ができることをやればいいのでしょうか？）

（俺ができる……。？ジュエルシードか？）

（ちゃんとわかってるじゃないですか。今日は平日、なのはさんは学校ですがジュエルシード集めくらいならば簡単にできるのでしょう？）

（……。そうだな。ありがと、シア）

そうして俺は目を覚ます。ジュエルシードを集めるという思いを胸に秘めて。

気絶から復活して少し遅い朝食をとり、台所に食器を持っていと、桃子さんに呼び止められた。

「あつ、丁度いいところに！和麻君、ちょっといい？」

「はい、なんですか？」

なんだろう。すごく嫌な予感がする。

「なのはがお弁当忘れちゃったみたいなの」

それを聞いた瞬間、俺はまわれ右をして走り出す。

ダッ！ 走り出す音

ガシッ！ 桃子さんに肩を掴まれる音

「ふふふ、逃げようと思っちゃダメよ？」

な、なん・・・だと・・・。さすがは戦闘種族といったところか・・・。戦闘種族ではない桃子さんでさえここまでやるとは・・・。

「もちろん、引き受けてくれるわよね？」

「いや、待て待て！行き先って学校だろ？部外者じゃ入れないんじゃないのか！？」

「その辺はお任せするわ」  
侵入方法

いやいやいやいや！お任せって言われても！しかも自分で侵入とか  
言っちゃってるし！

「返事はイエスかはいのどちらかよ」

拒否権ねええええええええええ！！

あの後も頑張っではみたが、押し切られて弁当を持っていくことにな  
った。地図は書いてもらったが、土地勘が全くないため、ものす  
ごく不安である。

「はあ……、なんでこんなことに……」

（まあまあ、いいじゃないですか。お弁当を届けた後でジュエルシ  
ード探ししよう）



「ああ。ってあれ？たしか俺って封印作業できないんじゃない？」

（ええ、今のままではできません。・・・これから先はジュエルシードを見つけた時にお話します）

「そうか。じゃあ見つけたらちゃんと話せよ？」

（仰せのとおりに）

「やれやれ。なあ、道こっちで合ってるか？」

（はい。ここをまっすぐです）

しばらくシアのナビ通りに歩くと、大きな学校が見えてきた。あれがなのは通う学校か・・・、パツと見セキュリティが固そうだなさて、どうしたものか・・・。

（マスター、どうしたんですか？）

「え？ああ、どうやってセキュリティを突破してなのはもとの行こうか考えてた」

（いやいや！なぜ突破すること前提なんですか！？普通に来客とし

てなのはさんと呼び出せばいいじゃないですか！)

「えゝ、それだと面白くないじゃん。主に俺が。」

(マスターが楽しみたいだけですか！)

「そうだ。だってなのはの驚く顔みたいじゃん？」

(ああ、頭が痛い・・・)

「落ち着け。半分は冗談だ」

(後半分はなんなんですか!?)

「お、あそこから入れるんじゃないかね？」

(無視しないでええええええ！)

さて、うまく校舎に潜入した訳なんだが……。

「なあ、なのはって3年の何組だ？」

（知りませんよ、そんなこと）

「あちゃー、聞いたときゃよかった。ん？あれは……………」

俺の視線の先には、いつも見るなのはとその友達であろう少女二人の後ろ姿。おお、ラッキー！

（なんか出来過ぎてる気がします……………）

「気にするな。行くぞ！」

潜んでいた影から人氣が少なくなった時を見計らってダッシュ！目標はなのは達が入って行った教室！ではなく……………

（なんで屋上に来てるんですか？）

そう、俺が走ってたどり着いたのは屋上。そろそろ次の授業が始まるから誰もいない。

「まあ落ち着けよ。理由は3つ。あの時教室に突入したらみんなから変な目で見られるだろ？それに、次の授業まで時間なかったし。最後は……………」

（さ、最後は！？）



そしてお昼ご飯の時、それは起こったの。

「あ、あれ・・・？」

「なのは。いつも通り屋上に・・・ってどうしたの？」

「・・・お弁当忘れてきちゃったの」

「なのはもドジねえ。とりあえず屋上に行きましょ？お弁当分けてあげるわ」

「アリサちゃん、ありがとう！」

「な、なに言ってるのよ。ほら、行くわよ！もうすぐかは先に行ってるから」

アリサちゃんに手を引かれ、移動しようとした瞬間、窓のほうから聞きなれた声が。

「よっ・・・と！なのは！忘れもの届けに来たぞ！」

そこにいたのは、まぎれもない和麻君その人でした。

S i d e o u t

「よっし、そろそろ昼時だな。いっちょ、行きますか！」

（それはいいのですが、どうやって行くのですか？）

「そりゃ勿論・・・ガサゴソ・・・お、あつたあつた。コレを使つて行くんだよ」

そう言つて取り出したのは普通のロープ。

（どこから出したんですか！？それになんでロープなんて持つて・・・ハッ！）

「いやいや、違つから。シアがなに想像してるのかは知らないけど、間違いだつてことぐらひはわかるから。あ、どこから出したかは企業秘密つてことで」

（そ、そんな・・・緊縛プ・・・ハッ！わ、私はいつたい何を！？）

「さて、時間だ。さくつと済ませて探索だな」

（む、無視しないでええええええ！）

シアを無視して、屋上の手すりつばいところにロープを結んで・・・と。ラペリング降下なんてテレビでしか見たことないけど、まあ大丈夫だろ。

「さあ、行くぜ」

手すりつばいものを乗り越えて足を壁につけ、ロープを引っ張つてまずは止まる。そこから注意して下に降りる。目標であるなのは教室の窓の上で止まり、大きく壁を蹴つて飛び、空いていた窓へ飛び込んでロープから手を離し着地。我ながらうまくいったものだ。

「よっ・・・と。なのは！忘れ物届けに来たぞ！」

「か、和麻君！？え？え？な、なんでここに！？」

おゝ、いい具合に混乱してらっしゃる。面白いな、やっぱり。

「・・・ん？なんだ？」

なのはに名前を呼ばれた瞬間、周りから殺気を感じた。え！？なん  
で？俺何かした？

（なのはさんがマスターを名前で呼んだからじゃないですか？）

（それでも、殺気を放ってくるのはおかしいだろ！）

（なのはさんは可愛いですからね）

（なるほど、理解した）

そっかゝ、なのはってモテるんだな。確かに可愛いと思うが・・・。

「和麻君！」

「ひゃい！？」

うわ、考え事してたから声がひっくり返っちゃった・・・。

「えと・・・ありがとう／＼／」

真っ赤になってお礼を言うのは。くっ！あ、あぶねえ……。もう少してお持ち帰りしてしまうところだったぜ……。

「あ、ああ……。じゃあ俺はこれで。邪魔したな」

そう言い残して、颯爽とロープを伝って下りていく。うわ、今思い返すとすげえ恥ずかしいことしたな、俺。

（今まで自覚なかったんですか……）

余談だが、和麻が去った後、和麻のことについてなのはに質問が集中し、クラスが軽いパニックになったとか。

学校をでた俺は、ジュエルシードを探すために歩きまわることにした。

「なんか、あんまり腹減らないな」

（ああ、それ私が抑えてるよ？）

「マシで！？食欲とかも抑えられるの！？」

（ある程度はね。でも抑えると後でその反動がくるから使い勝手はイマイチかな）



「なるほど。じゃあ今日はそのまま抑えておいてくれ」

(了解)

さつととっ、どこにあるかな。

「あゝ、シア？見つけたんだが……」

(え？どこどこ？)

「その電柱の下」

(あ、ホントだ)

「で、どうやって封印して回収するんだ？」

(んじゃ教えようか。まずは久しぶりにレンをユニゾン・アウトさせて)

「いいのか？それじゃリミッターが……」

（だいじょぶだいじょぶ。私とレンで3ランクずつ受け持ってるから、レンを外しても3つしか上がらないよ）

「3つ・・・ってことはSランクまで解放ってことか？」

（そういうこと。じゃあレンを融合解除して）

「了解。レン、ユニゾン・アウト」

「ん・・・ふあゝ。あれ？やっとあたしの出番かい？」

「そうらしいんだが・・・。シア次はどうするんだ？」

（では次に、レンを待機状態にします）

「待機状態あつたのか！？・・・とりあえずやってみるよ。レン、待機状態に戻るか？」

「ああ、あれを使うのかい。いいよ、モードリリース！」

レンがそういった瞬間には、すでに彼女はいなくなっており、レンが立っていた場所にはペンダントが落ちていた。

（レンはペンダントが待機状態なんです。では、ペンダントを拾って『モード1、セットアップ』と言ってください）

「ほかに機能があつたのか・・・。よし！レン、モード1、セットアップ！」

《やれやれ、しょうがねえなあ》

あ、そこはレンのままなんだ。

「しょうがないってどういう・・・っておわ！」

ペンダントはその形を変えていく。これは・・・例えるならFF？のガブレード（スコールのやつ）か？いや、例える必要すらないな。だって全く一緒だし。

「シア！？こ、これは一体どういうことだ！？」

（それが私たちのアームド形態ですよ。そうですね、言うなれば私たちはただのユニゾンデバイスではなくアームド・ユニゾンデバイス、といったところでしょうか。ちなみにその形になったのはマスターの記憶からデバイスに最適な武器を探したからです）

「アームド・・・ユニゾン・・・？」

（はい。名前の通り、アームドデバイスであり、ユニゾンデバイスでもある存在。世界でただ一つ、マスターの為だけのデバイスです）

「俺だけの・・・」

（そうです。さあ、封印しましょう。やり方は簡単です。レンに封印の指示を出すだけです）

「・・・レン、ジュエルシード封印。頼めるか？」

《まっかせなさい！》

「・・・よし！ジュエルシード、シリアル？封印！」

《オーライ！》

無事に封印されるジュエルシード。しかし、封印って大変なんだな。

（お疲れ様です、マスター。初めてにしては、上出来でしたよ？）

「そりゃ、お前らのサポートがあるからな」

（ふふつ。では、次に行きましょう。レンはちゃんと待機状態にしておいてくださいね？）

「わーってるよ。俺だって銃刀法違反で捕まりたくない」

（よろしい。あ、そうそう、私たちにはカートリッジシステムも付いていますので）

「やれやれ・・・。お前らは非の打ちどころがない、完璧なデバイスだよ。俺にはもったいないくらいだ」

こうして、俺達のジュエルシード探しが始まった。



### 第三話（後書き）

どうも、作者です。今回、和麻は探し物で忙しいので、私一人であとがきを進めていきます。

え、今回はシアとレン、2人の秘密が明らかになっちゃいましたね。アームド時のガン レードでは、作者がFF？が好きだから出しちゃいました。

最後にこのような駄文をここまで読んでくださった皆様に感謝を申し上げます。

・・・原作キャラの口調が難しい。

#### 第四話（前書き）

作者「原作通りって難しいね」

和麻「何をいきなり」

作者「もう口調とかさっぱりだよ」

和麻「もう一回アニメ見るなりして勉強しろ」

作者「だよ。まあ、頑張るけど」

和麻「頼むよ？じゃあ、始まるぜ！」

## 第四話

あれから町中を探し回った結果、俺はジュエルシードを3つ回収することができた。

（マスター、お疲れ様です）

「ああ、お疲れさん。レンもありがとな」

《まあ、これぐらい余裕よ》

（今日で3つも見つかるのは幸先がいいですね）

「全くだ。さて、もう夕方だし、帰りますか」

（ですね。じゃあレンとユニゾンをしてください）

「・・・なあ、待機状態のままじゃダメなのか？」

（あまりオススメはしませんね。まだマスターは未熟ですから、Sランクでも魔力が暴走する恐れがあります）

「そつか・・・、俺も頑張らないとな。レン、ユニゾン・イン」

《はあゝい。じゃあまた何かあったら呼んでね》

なにげに、レンって一番楽なポジションだよなあ・・・。あれ？これ回収したら神社でのレイジングハートの自動起動のシーンがなくなるんじゃないか？・・・まあ、いいか。



「ただいま」

「おかえりなさい」

家に帰ると、なのはが出迎えてくれた。

「今日はお弁当持ってきてくれてありがとう」

「なんのなんの。おかげで面白い顔見せてもらったからな」

「も、もお／＼」

手洗い、うがいをしてリビングへ。そこには、面白いものを見つけたと言うような顔をした桃子さんとなにやら申し訳なさそうにしているのがいた。

「ただいま……どうしたんですか？」

「うふふ。和麻君、なのはの彼氏になったんですって？」

「……へ？」

「あら？違うの？なのはがそんなことを言うからってつきり……」

待て待て待て。これは一体どういうことだ？俺の知らない間に何が  
あった！？

（マスターって、フラグメイカーだったんですね）

（いやいやいや！そんなフラグ立てた覚えはねえから！）

（・・・無自覚ですか。最悪ですね）

（お前うるさいよ！？）

「え〜っと、なのは。どういうことだ？」

「え、えとね。今日和麻君が教室から出て行った後のことなんだけ  
ど……」

S i d eなのは（回想）

和麻君がお弁当を持ってきてくれました。でも、窓から入ってくる  
のはちよつとどうかと思うの。おかげでびっくりにした顔を和麻君に  
見られちゃった……。うう、恥ずかしい……。

「……た、高町さん！今の人って誰！？」「……」

クラス中からそんな声が聞こえてきました。にやはは……。や  
っぱりそうなるよね。

「あの子は和麻君って言って、私の家で一緒に住んでるの」

「「「なッ！なんだってー！」「」「」

男子うるさいの。

「和麻君かあゝ。カッ」よかったよねゝ」

「だよねゝ」

「うんうん！」

「ねえ、高町さん。彼っていくつ？」

「ふえ？9歳だって言ってたよ？」

「同年！？」

「同年にしては大人っぽかったよねゝ」

「うんうん。・・・もしかして高町さんって彼と付き合ってるのかな？」

「・・・気になるね」

「聞いてみようか」

「だね。おゝい高町さん」

女子3人組が屋上へ行く準備をしていた私のところへやってきました。なんだろう？

「ねえねえ、高町さん。彼とはどういう関係なの？」

「ふえ？彼って・・・和麻君？な、何にもないよ！？」

「ほんと？？なんかアヤシイなあ」

「ほ、ほんとだってば！わ、私約束があるから！じゃあね！」

あ、危なかったの。だって、一緒に寝たなんて言えないし・・・。

「あつ、やっと来た！なのは、遅いわよ！」

「い、ごめんね。クラスみんなに捕まっちゃったの」

「さっきの男の子のこと？」

「う、うん」

「そつえば気になるわね。あいつ一体何者なの？」

「教えて、なのはちゃん」

「わかったの。えっとね……」

親友のアリサちゃんとすずかちゃんに聞かれたので、私は魔法とかのことは隠して話したの。

「へえ、そんなことがあったんだ」

「じゃあ和麻君……だっけ？はなのはちゃんのお家に住んでるの？」

「うん、そうだよ」

「なのは、そいつに何かへんなことされなかった？」

「ふえ？何もないよ？」

したのは私……なんて言えないの！

「そっか、よかった。何かされたらすぐに言いなさい？」

「うん。ありがとう、アリサちゃん」

「べっ、別にお礼なんていらないわよ！」

私たち3人は楽しくお弁当を食べました。この後に待ち受けることに気づきもしないで……。

それは、教室に帰った時のお話でした。

「あつ、高町さん！聞いたわよう、さつき窓から入ってきた人って高町さんの彼氏なんだって？」

[illegible]

「あ、あれ？違うのかな？聞いた話ではそうだったんだけど……」

わ…私と、かつ…和麻君が恋人！？で、でもアリかなあゝ／／

「ちよつとなのは！なに大きな声出してんのよ！」

「ア、アリサちゃん……」

「なに？　どうかしたの？」

「あのね……」

かくかくしかじか四角いム（ry

「なのはがねえ……。でも、いいんじゃない？好きなんですよ？」

「う、うん……。」「

「ならいいじゃない。ねえ、すずか？」

「うん！」

「で、でも……。和麻君が私の事どう思ってるか分からないから……。」「

「あのねえ、なのは。そいつがなのはの事嫌いだったら、わざわざお弁当なんて持ってこないでしょ？」

「そうだよ、なのはちゃん。もっと自信を持たないと」

「うん、そうだよね。ありがとう。すずかちゃん、アリサちゃん」

S i d e o u t

「……。……というわけなの」

あちゃー、マズったな。やっぱり呼び出してもらうべきだったか。

「なるほど……。分かったわ。じゃあ……。」「

そう言っただけのほうを見る桃子さん。うわ、この状況を楽しんでや

がるよこの人。

「今ここで答えてもらいましょうか。ね？和麻君」

やっぱそう来たか……。どうしょ。

「あ、あははは……。答えないとダメですか？」

「もちろん」

「和麻君は私の事……。嫌いなのか？」

くっ！その聞き方は卑怯だ。

「……。嫌いなわけないだろ」

「え……。じゃあ……」

言ってから気づく。俺はなのはの事が好きなのか？確かに、俺の気持ちの中にはなのはが好きだという気持ちがある。だが、それは本当の思いなのか？……。分からない。

「確かになのはの事は好きだよ。でもね、それが恋心とかなのかどうかは分からないんだ」

「どうやら脈はあるみたいね、なのは」

「うん！」

あきらめる気はないのね……。嬉しいけど、なんかちょっと複雑



だな。

「あ、そうだ。和麻君、お風呂沸いてるから先に入ってきたら？」

「風呂ですか？じゃあお言葉に甘えて」

今日は一日中外にいて、しかも封印なんて体力のいる作業してたから汗だくなんだよね。

ざぶ～ん

「はあ～、生き返るう～」

（オヤジ臭いですよ、マスター）

「ほっとけ！俺は風呂が好きなんだよ！」

（全く・・・。ツ！マスター、誰か来ます）

「こっちにか？一体誰だ？」

士郎さんか？いや、士郎さんは厨房にいたはず。じゃあ恭也さん？それも違うな。道場から2人分の声が聞こえてたから。だから美由希さんも違う。じゃあ誰だ・・・？

「え、えと。お邪魔します・・・／＼」

なのはでしたー。って・・・ええええええ！？

「なっ、なのは！？なんでここに！？」

「お母さんが『和麻君の背中を流してきなさい』って・・・」

また桃子さんか・・・。

「ほら、和麻君！こっち来て座って！」

・・・逆らわないほうがよさそうだな。あ、なのははちゃんとタオル巻いてるよ？

「わかったわかった」

俺はなのはのもとに行き、椅子に腰かける。泡たつぷりのスポンジを持ったなのはが近寄ってきて、背中を洗い始める。・・・なかなか気持ちいいな。

「和麻君。ど、どう？気持ちいい？」

「ああ、気持ちいいよ」

「えへへ・・・」

（なのはさんデレデレですね）

（デレデレすぎて逆に怖いんだけど・・・）

（このまま進むとヤンデレ化するかもしれませんね）

（シャレにならんから止める）

「はい、背中終わったよ」

「ああ、さんきゅ。お返しに俺がなのはの背中洗ってやるよ」

「ふえ！？えとえと・・・お、お願いします／＼」

ふふふ・・・なのはには悪いが少し楽しませてもらうかな。

「やあ・・・あん・・・はあ...はあ...んっ」

あれ？おかしいな・・・。俺はただなのはの背中を洗ってるだけなのに、どうしてこうなった？

（変態ですね、マスター）

（ちょっと待て！なんでそうなる！？）

（年端の行かない子にそんな声出させるなんて変態以外ないでしょうー！）

（なんか酷い！俺はいたって真面目なのに・・・）

とりあえずシャワーで泡を落として・・・っと。

「おゝい、なのは？大丈夫か？」

「ふぁ・・・うん。なんとか・・・／／／」

「すまん。ちょっと調子乗った」

「ううん、いいの。私は大丈夫だよ」

（会話だけ聞いてると事後のようですね）

（くだらんこと言っなよ！）

（まあまあ。そろそろ上がったほうがいいですね。結構時間も経ってますし）

（了解）

「なのは、そろそろ上がらないか？」

「そ、そうだね・・・／／／」

「どうした？顔が真っ赤だが・・・のぼせたか？」

「だ、大丈夫なの。先あがつてるね!」

あ、行っちゃった。仕方ない、もう一回温まってから出よう。

夕飯を終えて、なのはの部屋へ。風呂の一件はもちろんからかわれましたよ?さすがに俺がなのはを洗った時の事は話してないけど。

「はぁ~~~~／＼／＼」

「え〜つと、なのは?」

「にゃ!な、なにな?」

「いや、ずーっとブーツとしてるから」

「え、そんなにブーツとしてた?」

「うん、10時からだから・・・かれこれ1時間くらい」

「ええ!?そんなに!?」

「それより多いかもしれな・・・ッ!魔力反応!?」

これはジュエルシードだな。場所は……学校？

「なのは、ジュエルシードだ。場所はなのはの学校だよ！」

あれ？ユーノいたんだ。すっかり空気だったな。

「うん！行こう、和麻君、ユーノ君。」

そういえばこれが俺となのはでの初出陣か。……飛行魔法が欲しいな。

「ところでなのは、ここからどうやって行くんか？」

なのはの部屋は二階である。

「ん、ユーノ君、どうすればいい？」

「そうだね……飛ぶ、のはちょっと危険だから歩いていこうか」

「だな。じゃあ先に降りるぞ。なのはは後から飛び降りる。受け止めてやるから」

そう言い残して窓から飛び降りる。二階から飛び降りるくらい、今の身体能力なら余裕だな。

「よし。なのは、降りてこい」

「う、うん。行くよ」

飛び降りたのはを受け止める。思ったよりもずつと軽いな。

「よつと。じゃあ行くぞ」

「リリカル、マジカル！ジュエルシード、シリアル？？<sup>20</sup>！封印！」

《シーリング》

「はぁ・・・はぁ・・・」

「なのは、お疲れ様」

「お疲れ。大丈夫か？」

「うん、なんとか・・・」

「フラフラじゃねえか。ほら」

なのはを背にしてしゃがむ。

「だ、大丈夫だよ」

「うるさい。フラフラしてるやつに言われたくないな。ほら、サッサとする」

「うう……。じゃあお願いなの」

「あいよつと。お前はもう寝てる。ベットには運んでおいてやるから。明日は休みだろ？」

「うん……。すう……」

「やれやれ。封印で体力根こそぎ奪われるようじゃあまだまだだな」

「え？和麻さんは封印したことがあるんですか？」

「敬語は止める。今日3つ封印してきたが？」

「ええ！？和麻さんって魔導師なんですか！？」

「いいや？」

「じゃあ一体どうやって……？」

「ユニ……。企業秘密だ」

「そ、そんなこと言わずに教えてくださいよ」

「だから嫌だと……。ほら家だぞ」

「話を逸らさないでくださいー！」



しつこいなこの淫じゅ・・・あれ？ユーノが淫獣だとすると、なのはと一緒に寝たり、風呂に入ったりしてる俺って・・・。いや、ダメだ。考えるな！

「あゝ、ユーノ。ちよつといいか？」

「なんですか？」

うわ、露骨に怒ってやがる。

「いや、あのさ・・・。部屋にどうやってあがればいいと思う？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ」

小一時間ほど考えた挙句、俺が最近使わないからすっかり忘れていた投影を使って縄梯子を作ること無事に部屋に入ることができた。ちなみに、投影を見たユーノ君はびっくりしていた。

部屋に入り、背負っていたなのはをベッドに置く。

「よいしょ・・・っと。ふう、これでよし。さ、寝よ。おやすみ、ユーノ」

「あ、はい。お休みなさい」

床の布団に転がる。さてさて、明日はどうなることやら・・・。

#### 第四話（後書き）

作者「全く先に進まないな」

和麻「誰の所為だよ・・・」

作者「フェイトが出るのはもうちよつと先になるかもな」

和麻「だろうな。原作通りだと、次はサッカーか？」

作者「だな。できれば、もう一つ進んでフェイト戦までいきたいんだが」

和麻「ま、あんまり無理すんなよ？」

作者「ありがと。ではまた次回」

和麻「ところで作者、よくも俺にあんな恥ずかしいことさせやがったな？」

作者「恥ずかしい・・・？ああ、風呂か？」

和麻「そつだよ！おま、あれはちとマズイぞ？」

作者「はっはっはっ、いまからそんなこと言つてると後が持たないぞ？」

和麻「止めろって言ってんだろっが！喰らえ！約束された勝利の剣  
！！」

作者「ちょ、待て！ぎゃあああああああ！」

和麻「フッ、悪は滅びたぜ・・・」

## 第五話（前書き）

作者「そついや和麻って、もらった能力ほとんど使っていないよね？」

和麻「誰かさんの所為でな」

作者「あはは……。ま、まあこれからは戦闘入るしさ。出番ならいくらかもあるよ」

和麻「そうであることを祈ろう。では、第五話、始まるぞ」

8 / 9 一部を大きく改訂

## 第五話

学校でのジュエルシード封印から一夜明けて、今日。今日はなの  
の学校は休みなのだが……。

「ほら、なのは。いい加減起きろって」

「今日は学校お休みだから、もうちょっとお寝坊させて」

こんな状態である。

「ったく……。ほら、起きろ！今日はサッカーの試合かなんかの応援に行くんだろ？」

「にゃ！？そうだったの！あれ？なんで和麻君が知ってるの？」

「さつき士郎さんから聞いた」

これは事実である。原作知ってるから、というのは理由にはできないからわざわざ士郎さんから聞いてきたのだ。

「ほら、さつさと着替える。俺は下にいるからな」

「はぁーい」

なんか妹を世話してるみたいだ。そんな経験は一度もないが、なぜかそう思える。

階段を下りて、リビングへ。そこで準備をしている士郎さんとバツ

タリ出会った。

「あれ？もう行くんですか？」

「ああ、僕は監督兼オーナーだからね。先に行っておくのさ」

「俺も後で見に行ってもいいですか？」

「もちろんだよ。なのはと一緒に来てくれるかい？」

「はい、分かりました」

「うん。じゃあ、行ってくるよ」

「いつてらっしゃい、士郎さん」

士郎さんを見送る。朝ご飯はもう食べたし・・・あ、サッカーの試合って何時からなんだろ？

## サッカー場

あれからなのは起こし、準備をしてからサッカーの試合会場までやってきた訳なんだが……。

「なのは、おはよう!」

「なのはちゃん、おはよう」

「すずかちゃん、アリサちゃん!おはよう!」

なのはの友達である月村すずか嬢とアリサ・バニングス嬢がいらっしやった。ヤベ、絶対昨日の事で何か言われるぞこりゃ。

「あら?なのは、そちらの方は?」

「ふえ?アリサちゃんは昨日見てるよ?」

おや?バレてない?

「え……、じゃあまさか……?」

「うん、和麻君だよ?」

まあ、そうなるわな。バレないでそのままなんて無理だろう。……とりあえず適当に挨拶しておくか。

「どうも、はじめまして……。でいいかな?柊和麻です。よろしくね」

自己紹介を、俺ができる目いっぱいスマイルと一緒にしてみた。

「う・・・／＼は、はじめまして。アリサ・バニングスです」

あれ？なんで顔が真っ赤になってるんだ？

「顔が真っ赤だけど、大丈夫か？」

「・・・ッ！だ、大丈夫よ！」

おお、持ち直した。

（マスターは自分の笑顔の威力をもっと知るべきです）

（なんのことだ？）

シアの言うことがさっぱり分からない。笑顔の威力？どういってことじゃ。

「えと、月村すずかです。えと・・・」

あ、そう言えば俺の年齢言ったっけ？ついつい礼儀正しくやっちゃまったが・・・。その所為で声がかげづらいのならどうにかしないと。

「え」と、月村さん？俺も9歳だからさ、そんな遠慮した話し方しなくてもいいよ？」

「は、はい。ごめんなさい、なのはちゃんから年は聞いてたんですが、実際会つとどうしてもその・・・」



「あゝそれわかる。なんか年上っぽいよね、主に雰囲気だ」

とアリサ嬢。俺そんなに老けてるのか………？

「あの、よかつたら和麻君って呼んでもいいですか？」

「ああ、もちろんだ」

「じゃあ私は和麻って呼ぶことにするわ」

「いきなり呼び捨てかよ！まあいいけど。じゃあおれもさすが、アリサって呼ばせてもらうぞ」

二人ともお嬢様なのになんでこうも性格が正反対なんだろう……。

「ほら、そろそろ試合が始まるよ？」

「ちゃんと応援しないと、ね？」

「うん！」

「ほら、ユーノ君おいで」

なのははユーノ君を肩に乗せる。あれ？原作と場所が違うな……。まあいいか。

そうして、試合は始まった……。

ピピッ！

甲高く鳴るホイッスルの音。どうやら怪我人がでたらしい。なかなか激しい試合だからな、けがの1つや2つはあるだろう。ここで控えと入れ替えか？と思っていた時、土郎さんから声をかけられた。

「和麻君。君、サッカーをやったことはあるかい？」

「和麻君、がんばってなのー！」

「和麻ー、しっかりしなさい！」

「和麻君、頑張ってね」

なのは、アリサ、すずかの応援を受ける。え？俺がなにしてるか？怪我したやつに代わりにサッカーでてるよ？

「やれやれ・・・っと」

飛んできたボールをトラップして落とし、ドリブル。フェイントを使って相手を翻弄し、脇を抜ける。一人、二人、三人……。気づけばゴール前、この空間にはキーパーと俺の二人だけ。

「はっ！」

軸足である左足に力を入れつつ、利き足である右でボールを思いっきり蹴る。ボールは狙い変わらず、ゴールに突き刺さる。まずはこれで一点。

「和麻君すごいの！」

「へえ、なかなかやるじゃない」

「和麻君、すごい……」

三人娘にもどうやら好評みたいだな。え？なんでそんなにやる気なのかって？それはな……

く回想く

「和麻君。君、サッカーをやったことはあるかい？」

「へ？ありますけど……」

「丁度良かった。実はね、さっき怪我した子の代わりに試合に出てほしいんだ」

「ま、待ってください！控え選手がいるはずでしょう？」

「控えの子は朝、風邪をひいたと連絡があつてね……」

「それでも、部外者の俺が入るのはマズいでしょう!？」

「ああ、それなら大丈夫だよ。向こうの監督の了承はもらったから」

万策……尽きたか……。

「お父さん、どうしたの？」

「ん？ああ、和麻君に試合に出てもらつようつにお願いをしてたんだ」

「ふえ!？和麻君、サッカーできるの？」

「一応、人並みには」

「どうだい？でてくれないかい？」

「……条件がある。たしか怪我したのはフォワードだったな」

「そつだよ」

「じゃあ、俺が一回ゴールを決めるたびに翠屋のケーキ1つ。もちろんホールで」

「分かった。その条件を飲もう」

「やれやれ、じゃあ行きますかね。あ、ゼッケン貸してください」

～回想終～

ってことがあったのさ。ちなみに俺は甘党である。

「さて、もう一本行きますか！」

結局、俺は4ゴールをしてチームを勝利に導いた。

「いや、すごいね。どうだい？チームに来ないかい？」

「いえいえ、俺なんてまだまだですよ。お誘いはありがたいですが、お断りしておきますね」

「ううむ、もったいないな」

誰が何と言おうと、もう俺はサッカーをやる気はない。

（なにかサッカーに嫌な思い出でもあるんですか？）

（前世でちょっと、な）

（詳しく聞いても？）

（聞いても面白くないし大したことない話だが・・・、まあいい。昔の話、小学生のころだったな。その時俺はとあるサッカークラブに所属していたんだ）

（前世からサッカーをしていたんですか。それならさっきの動きにも納得がいきます）

（そうかい。話を続けるが、その監督があんまりいい奴じゃなく  
つてな。しょっちゅう怒鳴られてたんだ。それでイヤになつて止め  
た）

(・・・・・・へ？それだけですか？)

（そうだけど？）

(私の不安と時間を返せええええええ！！)

（うわ！なんだよ急に！）

（なんだよ急に！、ではありません！いつになくシリアスな感じだったから話を聞いてみれば・・・。オチが酷いですっ！）

（だから言っただろうが。面白くもないし大した話じゃないって）

（その前振りの所為です！・・・・・・はあ、もういいです）

(・・・?なんなんだよ、全く)

シアの奴どうしたんだ？俺にはさっぱり分かん。

「さて、士郎さん。約束は守ってもらいますよ？」

「あはは、分かつてるよ。おーし、みんなよく頑張った！いい出来

だったぞ！練習通りだ！」

「「「「「はい！」「」「」「」

「じゃあ、勝ったお祝いに、飯でも食うか！」

「「「「「イエーイ！」「」「」「」

さて、あれから士郎さんと翠屋JFC（チームの名前。さっきのはが教えてくれた）と三人娘、それから俺は、勝利のお祝いということで翠屋に戻り、昼食をとることになった。

「すごいじゃないの、和麻！」

「うんうん！カッコよかったよ！」

「さすがは和麻君なの」

「あはは・・・ありがとう」

止めて！そんな尊敬の目で見ないで！動きが体に染みついているだけです！

「そっいえば和麻って学校には行ってるの？」

「あゝ、行つてないよ?」

「ダメじゃない!ちゃんと行かないと!」

「い、いや・・・これにはちよつとした訳が・・・」

「あら、どんな訳なのかしら?」

「もつ、桃子さん!?いつからいたんですか!?」

「『あゝ、行つてないよ?』のあたりかしら」

「そ、そうですか・・・。じゃあ、お話しますよ」

さてつと、どうでつちあげようかな。

(仕方ないとはいえ、無いことをさもあるように言つのは罪悪感がありますね)

(仕方ないだろ・・・。よし、思いついた)

「実は・・・俺には両親がいないんです」

「「「「!?!?」」」」」

(うわゝ、イキナリ爆弾を落としましたねゝ)

(うっさいよ。要はインパクトだよ、インパクト)



（それは違うと思います・・・）

「あ、最初っからいないわけじゃなくて・・・、俺が5歳の時に交通事故に巻き込まれて・・・。それで俺をかばった両親は・・・」

なるべくつらそうな顔をして話す。たしかにこれはキツいな。罪悪感をひしひしと感じるよ・・・。

「ストップ！もういいわ。・・・ごめんなさいね、辛いことを思い出させて」

「いえ、いいんですよ。・・・それになのは達や、高町家のみなさんにも会えましたね。それだけで俺は幸せ者ですよ」

ニカツと笑って答える。あれ？3人娘の顔が赤いような・・・。

「無理しちゃだめよ？和麻君。ここにはいつまでもいていいからね」

「はい、ありがとうございます・・・桃子さん」

こうして、俺は高町家とまた一步親密になった、気がした・・・。

あ、条件のケーキはアリサ達のお土産に1ホールずつあげましたよ？それでもまだ2ホールあるし。……太ったらどうしょ……。

そんなこんなありまして、昼食会はお開きとなりました。あれ？なんか忘れてるような……。

（マスター、微かですが魔力反応があります。おそらくジュエルシードかと）

（おお、そうだ！ジュエルシードだ！今だれが持つてる？）

（えゝ……。さっきキーパーをしていた子ですね）

（そうか。だとすると回収はちょっと難しいな。）

（ですね。どうしますか？）

（様子見。発動したら封印しよう）

（了解です、マスター）

様子見というのは半分ウソだ。この世界は原作と違って、なのはがほとんど魔法を使ってない。だから、今回の事件で意志を固めてもらうっていう狙いもあるのだ。

（マスター！ジュエルシールドが発動しました！）

（ああ、こつちでも反応を捉えた）

（なのはさんが先に向かったみたいですね）

（そうだな。じゃあ俺らも行くか）

（仰せのままに）

「ちょっと出てきます！夕飯には戻りますね！」

「はい、気をつけていくのよ！」

「うわぁ…………。思ったよりも酷いな」

（ですね…………なのはさんはあのビルの上のようです）

「じゃあなのはが見える位置まで移動しようか」

（では、あちらのビルがよろしいかと）

「お、いいね」

シアが指定したビルの上へ上がる。おお、よく見えるな。

（おや？なのはさんがあの位置から封印を行うようですよ？）

「普通なら無理だと思うだろうな」

（いえ・・・、さすがになのはさんでもあの距離からは厳しいと思いますよ？）

「ふふつ、まあ見てろつて」

原作通り、なのはは無事にジュエルシードを封印した。俺がなのはのいるビルの上にたどり着いた時には、すでに意志は固まったのか、とてもいい顔をしたなのはがいた。

S i d e シア

私は遠距離から封印しようとしているなのはさんを見つけた。普通ならばあの距離での封印はほぼ不可能なはず。まして、魔導師になったばかりのなのはさんでは特にだ。

「普通なら無理だろうな」

マスターはそう言います。それではまるでなのはさんが封印に成功

するような言い方ではないですか。

（いえ・・・、さすがになのはさんでもあの距離からは厳しいと思いますよ？）

これは正当な判断だ。別になのはさんを貶したりしたい訳ではない。

「ふふっ、まあ見てろって」

分かりました。ですが、もし封印できなかったらどうなるか分かっていますね？

・・・驚きました。まさか封印に成功するとは、思ってもみませんでした。なのはさん、あなたは一体・・・？

S i d e   o u t

「よう、なのは。封印御苦労さま」

「あ、和麻君！」

「悪いな、手伝えなかった」

「うっん、いいの。私にもできるんだから」

「そうか。じゃあこれ、渡しておくよ」

取り出したのは3つのジュエルシード。俺が探したやつだ。

「ふえ！？で、でも……」

「まあ、持っていてくれ。俺には必要なものだからな」

「うん、分かったの」

「さて、帰ろうか。桃子さんも心配するだろうからな」

「うん！」

そう言って、俺の腕にしがみついてくるのは。……まあ、今日だけはいいか。

## 第五話（後書き）

作者「なあ、和麻」

和麻「なんだ？」

作者「なんかさ、話が進むたびにグダグダになってる気がするんだが」

和麻「……気のせいじゃないと思う」

作者「だよな……。仕方ない、次話からはいらない所カットです  
っと主人公視点にしよう」

和麻「それは面白味がなくなるから止めて」

作者「むう、どうやったらグダグダにならないものが書けるんだろ？」

和麻「知らん。それはお前の仕事だろ」

作者「和麻が冷たい！？反抗期か……………」

和麻「ほう、いい覚悟だ。相当死にたいと見えるな」

作者「へ？ちょ、ちよつとまぎゃああああああ！！」

和麻「フツ、鎧袖一触とはこのことか……………」

## 第六話（前書き）

どうも、作者です。

今回やっとフエイトを出すことができました。ですが、相変わらず駄文のままです。ご了承ください。

それでは、どうぞ。



## 第六話

日曜日にサッカーの試合にでてから早一週間、今日は週末でお休みなので、すずかの家にお邪魔することになっている。なんで俺もかという、すずかに招待されたからだ。まあ、招待されなくても近くまで行くけど。だってフェイト見たいじゃん？

ちなみに俺はこの一週間は投影の鍛錬してたよ？家でゴロゴロしてた訳じゃないよ？ユーノに結界魔法を見せてもらって複写眼でコピーさせてもらった。ユーノのやつ、最初驚いてたな。

「おい、なのは！早くしないと置いてくぞ」

「にや！？待ってなの」

ちなみにだが、一緒に行く予定だった恭也さんには先に行ってもらっている。

（そういえば、やけに嬉しそうですね）

（ん？ああ、そう言えばお前には原作知識が無かったんだよな。すっかり忘れてた）

（原作・・・？）

（ああ。簡単に言つとな、この世界は俺のもといた世界ではアニメとして放送されていたんだよ）

（ほえ、にわかには信じがたいですね）

（この前の封印の時のいい例だろ？俺はその先に起こることを知ってるんだ）

（なるほど・・・でもそれって何か卑怯じゃないですか？ネタバレみたいで）

（まあ、確かにな。でも、それのおかげで最良の選択ができるんだからな）

（なるほど。じゃあマスターはこの先起こることをすべて知っているんですか？）

（いや、それがな、全部を覚えてるわけじゃないんだ。ところどころ忘れてるところもあるし・・・）

（やはり、完璧と言うわけではないのですね）

（所詮人間の記憶だしな）

「和麻君、おまたせ」

「おう。・・・なかなか似合ってるな、その服」

「え、そ、そう・・・？」

「ああ」

「えへへ、ありがとう／＼」

（フラグ強化してどうするんですか？）

（ハッ！し、しまったあああああ！）

残念ながら、月村家での会話はカットさせてもらっ。べ、別に俺が会話に入れなくてしょぼーんってしてたからカットした訳じゃ、無いんだからね！

「ん？」

「どうかしましたか？」

「ああ、いや。なんでもないよ、すずか」

（シア、感じたか？）

（ジュエルシードですね、しかもすぐ近くです）

（どうする？）

（すぐ回収、と行きたいですがそれではマズイのでしょうか？）

（話が早くて助かるよ。あれはなのはに任せる）

俺たちがジュエルシードの扱いについて話していると、なのはとユーノの念話が聞こえてきた。話す人の指定ぐらいしろよ……。

（なのは！）

（うん、すぐ近くだ）

（どうする？）

（えっと……えっと……）

悩んでるな。ああ、そうか。回収に行くということはお茶の席から立たないといけない。でも、理由もなしに立つことができない。だから悩んでるのか。

（そうだ！）

なにを思ったか、なのはから飛び降りて走り出すユーノ。なるほど、その手があったか……。

「ユ、ユーノ君？」

「あらら？ユーノどうかしたの？」

「うん、何か見つけたのかも。ちょ、ちょっと探してくるね」

「一緒に行こうか？」

「大丈夫。すぐ戻ってくるから、待っててね」

そう言って駆け出すのは。よしよし、無事に抜けられてなによりだ。

「ねえ和麻？なのはを放っておいていいの？」

「ん？ああ、少しして帰ってこなかったら行ってみるよ」

「そう…」

え？話に乗れない俺がなにしてるのかって？猫と戯れてます。ここ、月村邸は別名猫屋敷とも呼ばれるほどに猫がたくさんいる。全部すずかが拾ってきた猫だが。どうやら、猫たちの里親も探しているらしい。

（そういえば、今回はなにが起るんですか？）

（大したことじゃないよ。子猫が一匹巨大化するだけ）

（…………それは十分に大したことでは？）

「なのは、遅いね」

「うん……」

そろそろ様子を見に行くかな。

「じゃあ俺が探してくるよ」

「お願いね、和麻」

「あいよ」

なのはが走って行った先へと向かう。・・・もう終わってるとかないよね？

「バルディッシュ、フォトンランサー、連撃」

《フォトンランサー、フルオートファイア》

黄色の魔力弾が巨大化した子猫に降り注ぐ。

「レイジングハート、お願い！」

《スタンバイレディ、セットアップ》

なのははすぐにバリアジャケットを展開、子猫を守りに行く。

お、あれはなのはのフライヤーフィンか。飛行魔法欲しかったし、もらっておこうかな。

（シア、複写眼使うから魔力漏れないようにしといて）

（了解）

俺は複写眼を使っただけなのは飛行魔法を解析、改良して自分の飛行魔法を作る。足から羽を生やすのは止めて・・・そうだな、翼にするか。名前は・・・「ウィング」でいいか。

（ネーミングセンス無いですね）

（うるせー！）

そんなことをしていると、先ほど子猫に魔力弾を撃った少女が下りてくる。いわずもがな、フェイト・テストロッサである。

（おお、なかなか可愛いな）

（・・・マスター？）

（あ、あははは・・・。じよ、冗談だつてば）

（全く、貴方って人は・・・。あ！ほら、戦闘始まっちゃいましたよ！？）

（いーのいーの。なのはに必要なのは経験だからな。助けるのはどうしてもって時だけ）

（そうですか・・・）

(そうだよ。だからもうちよっと思守ろっ)

(そうですね……。おや?)

(どうした?・・・ッ!まずい!)

(どうしたのですか?)

(あのままじゃ……なのはが危ない!)

《デバイスフォーム》

《シューティングモード》

なのはのレイジングハートが砲撃態勢に入る。

《デイベインバスター、スタンバイ》

《フォトンランサー、ゲットセット》

互いに構え、いつでも攻撃できるようにする二人。その時、巨大化した猫が鳴き、なのははそれに気を取られる。



「ごめんね」

《ファイア》

打ち出されたのは黄の魔力弾。気を散らしていたなのはには防ぐことができない。

着弾。そして爆発。

爆風がはれ、フェイトが目にしたのは、今まで戦っていた栗色の髪の少女と彼女を庇うように立つ一人の男の子だった。

（ふう、間一髪だったな）

（ですね、プロテクションを見ておいたのは正解でしたね）

（だな。魔力だけで障壁張るの疲れるけど、プロテクションなら簡単だ）

「え！？和麻君！？なんでここにいるの！？」

「どっかのダアホが勝手に引っつまうからついてきたんだよ。で、何か言うことは？」

「ごめんなさい・・・」

「ったく。んで、そちらのお嬢さんはどなたかな？俺は和麻、柊和麻だ」

「フェイト。フェイト・テストロッサ」

「フェイトか・・・、いい名前じゃないか」

そう言うと、フェイトの頬が微かに赤くなる。なんだ？風邪か？

（・・・・・天然ジゴロ。お仕置きが必要ですかね）

「和麻君・・・・。後でお話なの」

「すみませんでしたあ！」

速攻で謝る。プライド？ナニソレ？喰えんの？

「ふふっ・・・」

そんな俺らを見て頬笑むフェイト。うん、やっぱり可愛い。

「なのは、今日のところは引くぞ。いいな？」

「うん・・・」

なのはの顔色は暗い。負けて相当ショックだったようだ。

「まあ落ち込むのも分かるけどさ。あ、じゃあ自己紹介だけでもしてきたらどうだ？」

とたんに明るくなるなのは。うん、実に分かりやすい。

「じゃあ挨拶だけでもしてこい。俺はここで待ってるから」

「うん！」

フェイトのもとへ駆けていくのは。フェイトは封印作業をしているようだ。……派手な封印魔法だことで。無駄が多いよな、あれ。

「ただいま、和麻君」

「ちゃんと話できたか？」

「うん」

「そうか、じゃあ戻るぞ。そろそろずか達が心配するだろうからな」

こうして、もう一人の魔導師との初邂逅は幕を閉じたのであった。

フェイトとの一戦があつてから、なのはは魔法の練習の時間を増や

した。相当悔しかったんだろう。俺もよく付き合わされた。まあ、おかげで戦闘経験ができたからよかったけどな。

「行くよ、和麻君！」

「おう！どつからでもかかって来い！」

「デイベイイイン」

《デイベインバスター》

「バスター！」

桃色の砲撃がこちらへと迫ってくる。回避は……無理か。

「仕方ないな……。『ロー・アイアス織天覆う七つの円環』！」

俺の前に七枚の花弁が現れる。一枚一枚が古の城壁に匹敵する対飛び道具用の宝具であるが

パリン！パリン！

なのはの砲撃はいとも簡単にそれを砕いていく。9歳でこの威力だと末恐ろしいな……。

結局、なのはの砲撃は5枚目にヒビをいれたところで止まった。本当はもっと堅いはずなんだけど……。やはりイメージが弱いみたいだな。

「なのは！次はこっちから行くぜ？」

「うん、いいよ!」

「しっかり防げよ? アクセルバレット、ファイア!」

アクセルバレット。なのはのアクセルシューターを改良して作ったオリジナルの魔法。本来の追尾機能を廃止し、直線的な動きをするようにした。おかげで威力、速度がかなり上昇し、並の魔導師の防御魔法なら撃ち抜ける自信がある。ただし、追尾はできないので、動く敵に当てるのは技術が必要。

「レイジングハート!」

《プロテクション》

どうやらなのはは全て受け止めるらしい。試しになのはのプロテクションを複写眼で視てみたが、ダメだ。強度が足りない。そんな防御では……

パリン!

「きゃあああああ!」

当然、こうなるわな。

「おいおい、大丈夫か?」

「和麻君、酷いの……」

「だから言っただろ? しっかり防げって」

「あんなの予想してないもん！」

「やれやれ。ほら、立てるか？」

「うん！」

なのは手を差し出す。なのは嬉しそうに俺の手を取って立ち上がる。

「よし、じゃあそろそろ夕方だけど、どうする？」

「もう少しやりたい！」

「はいはい、後一回だけな。焦ってもしょうがないんだし」

「はい」

これで少しはフェイトに近づけるかな？俺もあの二人には友達になつてもらいたいところだし。てか、そうじゃないと話がかわつちまうからな。

……そういえばそろそろまた何かイベント的なものがあつたよ  
うな気がするんだけど……。思い出せないな。なんせアニメみた  
の数年前だし……。まあ、なるようになるだろ！



## 第六話（後書き）

和麻「なあ、作者？」

作者「なんだ？」

和麻「戦闘は？」

作者「無印は大事なことだけしか戦闘は無いな。しかもお前はほとんど戦わないし」

和麻「まあ、あの二人の邪魔しちゃイカンよな」

作者「そうそう」

和麻「じゃあ次は戦闘があるんだな？」

作者「…………たぶん」

和麻「オイ！」



## 第七話（前）（前書き）

作者「おまたせしましたっ！」

和麻「誰も待つてないんじゃない？」

作者「酷いッ！」

和麻「俺は事実を言ったまでだ」

作者「俺のガラスのハートはたった今砕け散ったよ……」

和麻「うるせえ！」

作者「クツ……。えー今回は温泉へ行く話ですが、前半にダラダラと書いてしまったため二部構成と相成りました」

和麻「強引に話を変えたか。てか、前半削れば1つに収まったんじゃないのかよ？」

作者「まあ、いいじゃん？」

和麻「お前ってヤツは……」

## 第七話（前）

この前のフェイトとの一件からしばらく経った今日、世間は連休に突入していた。が、翠屋は年中無休である。なので、連休の時などは店をほかの店員に任せて、ちよつとした家族旅行などに行くらしい。今回は高町家はアリサ家、月村家とメイドさん達と一緒に温泉旅行に行くのだ。まあ、俺がその話を聞いたのは今朝なのだが。・・温泉へ向かう車の中はちょうど暇だし、少し今朝の事を思い出してみようか。

「和麻君、起きて。朝だよ！？」

「んんっ．．．すう．．．」

「も、和麻君！」

「んあ．．．ああ、なのはか。おはよう」

「おはよう！なかなか起きてくれないから大変だったんだよ？」

「ああ、悪い。てか、なのはに起こされるなんて珍しいこともあるもんだ」

「酷いの．．．」

「まあまあ、そう怒るなって。これはこれでアリかなって思うし」

なのはの頭を撫でてやる。相変わらずいい手触りだ。触ってて気持ちいい。

「そ、そう？えへへ」

なんてことをしてるうちに寝起きでボーッとしてた頭も、活動を開始し始める。

「さって、なのは。着替えるから先に下に降りててくれ」

「はい」

なのはが部屋から出たところで着替えを始める。ちなみに俺は下から着替える派だ。そんな派閥があるのかは知らないが。・・・だから、俺はこの後起こる恐ろしい出来事を回避することができたのであった。

「さって、着替えますか」

（マスター、おはようございます）

「ん、おはよう」

（着替えるのですか？）

「そうだけど、どうかしたか？」

(いえ……。邪魔をしました。どうぞ続けてください。私はここから見ていますから)

「ちょ！？シア！？」

この状況はなんだ！？ご乱心か！？

(何を躊躇っておられるのですか？ああ、もしかして私に着替えさせると仰るのですか？でしたら……。)

「ちょっと待て！？なんでそうなるんだよ！？しかもお前は出てこないだろうが」

シアが出てきたら……。おそらく俺の魔力が暴走 風船のように“パーン！”となるだろうな。

(レンもある程度は抑えられますから大丈夫です)

「そういう問題じゃねえよ！あーもーめんどくさい！デバイスとの同調の一部を一時的にカット」

これでシアにはこっちが見えない……。はず。今のうちに下から着替えるべし！

「……。よつと。ズボンはこれでいいか。後は上だけど……」

んゝ、なんかいいシャツあったかなゝ。え？上半身？もちろん裸だよ？某蛇の人で言うとなイキッドだな。下は脱げないのか？なんて聞かないけど。

ガチャッ

「和麻く〜ん? ご飯冷める・・・よ・・・?」

「んあ?」

俺がドアのほうに目をやると、そこには真っ赤になったなのはが、ノックぐらいすればいいのに。

「お〜い、なのは?」

「にゃ・・・」

「にゃ?」

「にゃ ああああああ!」

その叫び声は、朝の高町家に響くには十分すぎる音量だった。

「それで、さっきの声は着替えていた和麻をなのはが見ちゃったかなの？」

「う、うん・・・／＼／」

所変わって食卓。あの後、すぐに着替えて下に降りたのだが、なのはが桃子さんと美由希さんに捕まっていた。相変わらずだな～と思いつきながら席に着く。

「おはようございます、士郎さん、恭也さん」

「「おはよう」

朝の挨拶をした後に、なにかいつもと違う空気を感じた。例えるなら、遠足がある日の朝か？要するに、空気が浮ついている。

「で、どうだったの？和麻君の体見たんでしょ？」

「え、えと、細いけどしっかり筋肉がついてて遅しかった・・・／＼／ってお母さん！？何言わせるの！？」

「「うふふふ・・・」

・・・決して空気が浮ついてるのはあの3人のせいではないと願いたい。あそこはスルーして、士郎さんにこの空気の原因を聞くことにした。

「あの、士郎さん？」

「なんだい？」

「今日は何かあるんですか？」

あれ？なんでみんなそんな驚いた顔してんの？桃子さん達でさえ驚いた顔でこつち見てるし。え、もしかして今日何かあるの知らなかったの俺だけ？・・・泣いていいかな？

「なのは、もしかして話してないのか？」

「ふえ！？・・・あ」

「なのは、ダメじゃないか。ちゃんと伝えておかないと」

「う、ごめんなさい」

情報の伝達ミスでよかった。本気でハブられてるのかと思ったよ・・・。

「すまないな、和麻君。てっきり伝わってるものかと思って」

「いえいえ、いいんですよ。誰だって忘れることはありますから。それで、今日は何があるんですか？」

「今日から2泊3日で温泉旅行に行くんだよ」

と、こんな感じだ。温泉に行く、と聞いて俺は素早く準備をした。準備と言っても、着替えを用意するだけだけど。それにしても温泉か。大好きなんだよね、温泉。

その後、全員の準備が終わって車で移動。移動した先にアリサやすずかがいてちよつとビックリしたよ。だって一緒なんて聞いてないし。で、それからいろいろあって、今に至るわけだ。ちなみに、俺は土郎さんが運転する車の後部座席にいる。俺の左は窓で、右になるのは、アリサ、すずかの順で座っている。

（はぁ・・・）

（どうしたんですか？ため息なんかついて）

（いや、暇だなあ〜と思って）

（彼女たちの会話に混ざればいいのでは？）

（男の俺が女の子の会話に入れるわけないだろうが）

なのは達は楽しそうに会話をつづけている。そんな中に入る勇氣は残念ながら持ち合わせてない。

（あ、そうだ。シア、質問いいか？）

（なんですか？）

（いや、魔力光のことなんだけどさ。俺の魔力光って何色なんだ？）



（?ああ、そういえばマスターは自分自身の魔法を持ってないのですね）

（そうだが……。それになにか関係があるのか?）

（ええ。マスターの魔力光は白なのですが、複写眼を使ってコピーした魔法はコピーされた人の魔力光と同じになるんです）

（じゃあ何か?なのは魔法を俺が使っている間は、俺の魔力光は桃色になるのか?）

（そうなりますね。それと、コピーした魔法を改良カスタムした場合は、コピーされた人の魔力光+白色になります）

（色までパクリますが、この眼は。ま、いいや。聞きたいことは聞けたから）

（お役に立ててなによりです）

「和麻君?どうしたの?」

なのはが声をかけてくる。・・・そうか、なのはから見れば俺ってずっとボーツとしてるように見えるんだだけ。

「ん?いや、どうもしないよ?」

「嘘なの。ずーつと外ばかり見てたし・・・」

なんて言い訳しよう……。まだシア達の事は話せないしなあ。

「だからなんでもないって」

「むっ、……えいつ！」

可愛い声とともになのはが俺の右腕にしがみついてくる。……つてちよっと！？なのはさん！？

「相変わらずなのはは和麻にべったりね」

「あらあら　なのはったら大胆ね」

とのたまう二人。上からアリサ、桃子さんね。すずかは笑ってたよ。

「ちよ、なのは！いきなりどうしたんだよ！？」

「だって、和麻君が楽しそうにしていなかったから……」

俺の所為か……。確かに周りから見たらあんまり楽しそうじゃないのかもな。

「そんなわけないだろ？俺はなのはと旅行に行けるだけで嬉しいよ」

「か、和麻君……／＼／＼／＼」

あれ？俺なんかまずいこと言っちゃった？

「あらあら　思ったよりも孫の顔が早く見れそうね」

「はいはい、それは私たちがいない所でやりなさい」

「／／／／／」

その後も、温泉宿に着くまでひたすらからかわれる（からかってくるのは主に桃子さんと美由希さん）俺となのはであった。

「や・・・やつと着いた・・・」

からかわれ続けること数時間、俺達はようやく宿に着いた。車内の記憶は・・・封印しよう。じゃないとトラウマになりそうだ。

「桃子、部屋割りなんだが・・・どうする？」

「そうね・・・、確か予約では3部屋だったかしら？」

「ああ、そうだね」

「じゃあ、私たちで1つ、恭也と忍さん、それにノエルさんとファリンさんで1つ、子供たちで1つでいいんじゃないかしら？」

「子供たちだけで大丈夫かな？」

「和麻君がいるから大丈夫でしょ」

「・・・それもそうだね。じゃあそうしようか」

「さて、まずは温泉よね」

「もう行くのか？」

「私も温泉に行きたいです」

「すずかもか。なのははどうする？」

「私も行くよ。和麻君も行くよね？」

ぐっ……。上目使い……。だと？いつの間にそんな技を……。

「わ、分かった。行く、行くから」

「やったー！」

「ほら、和麻君行こっ！」

「ま、待て！そっちは女湯だろうが！」

「そっだよ？」

「俺は男だッ！」

「でも、ほら」

なのはが何かを指さす。……ん？注意書きか？なにになに……？

『女湯での男子入浴は10歳以下でお願いします』

読み終わった瞬間顔が引きつったね。この野郎なんてこと書いてやがんだ、とこの旅館を恨んだよ。

「さっ、じゃあ行こっか」

「や、やめてえええええ！」

俺の必死の叫びも空しく、女湯に引きずられていくのだった……。

「「「うわあ〜」」」

3人とも嬉しそうだ。まあ大きな風呂って見ただけでなんだか嬉しくなるよね。あれ？俺だけ？

「ほら、和麻君こっちこっち」

「まったく、あんまりはしゃいでると滑るぞ？」

「もう心配性なんだから。大丈夫だよってきやあ!？」

ほれ見る言わんこっちゃない。

「よつと。大丈夫か？」

「う、うん……。あ、ありがとう／＼／」

「氣いつけろって言ったのに」

「にやははは……。」「

「あらあら、お風呂でイチャイチャするなんてやるわね、なのは」

あれ？どつかで聞いた声が……。ってこれ桃子さんの声じゃん。恐る恐るまわりを見渡すと……。いましたよ、湯船の中に。しかも美由希さんと忍さんまで。

「お、お母さん!？」

「桃子さん……。見てたんですか？」

「もちろん」

この後、また散々にからかわれたのは言うまでもない話だった。え、ユーノ？アリサにとっ捕まって洗われてたよ？淫獣確定だねっ！

カオスな風呂からどうにか生還した俺は、浴衣に着替えた3人組が探検に行くというので、一人ぶらぶらと散歩をすることにした。三人の浴衣姿はなかなか可愛かったので、素直に褒めたらみんな赤くなっていた。湯あたりでもしたのかな？

「ん〜！いい空気だな〜」

（マスター、お楽しみのところ申し訳ありませんが）

「ん？どつたの？」

（近くに魔力反応です）

「魔力反応・・・？ジュエルシードか？」

（いえ・・・それが、どうやら魔導師のようです。この魔力は以前どこかで感じたことがあるんですが・・・）

「魔導師・・・？あゝ、もしかしてフェイトじゃない？」

（ああ！そうだ、そうですよ！間違いなくフェイトさんです！）

「ふ〜ん、近くにいますのか。じゃあちょっくら挨拶でもしに行きま

すか」

お目当てのフェイトは意外と速く見つかった。木の上にいたのでちよつと離れたところからでも見えるのだ。

「おゝい、フェイト？」

お、こつち向いた。

「和麻？」

「おお、覚えててくれたか。久しぶりだな。ジュエルシードか？」

こくんと頷くフェイト。か、かわええ……。

「そつか。ま、健康には気をつけろよ。じゃあな」

踵を返して歩き出そうとしたが、前に進まない。否、進めない。

「あの、フェイト？放してくれると嬉しいんだけど」

進めない原因はフェイト。俺の浴衣をしっかりと握ってらっしゃる。

「和麻がいるってことは、なのはもいるんだよね？」

「ああ、いるよ？」



「そう」

それだけ言っと手を離れた。

「じゃあ今度こそ行くわ。またな」

フェイトの頭をしつかりと撫でる。おー、なのはも気持ちいいけど、フェイトのもまた格別だな。ん？

「どうした？顔が赤いけど？風邪か？やっぱり無理してるんじゃないのか？」

（マスター、さすがにそれはどうかと思います）

（????）

「ッ！な、なんでもない！」

「そうか？フェイトがそう言うならいいけど……。んじゃ、またな」

「……うん」

旅館への道を戻りながら考える。原作からかけ離れてないかと。まあ全部俺のせいなんだが。

（マスター、全く同じ世界なんてものは存在しないんですよ？）

「それもそうだが……」

（この世界は原作から離れつつあります。何が起るか分かりませんから、注意だけはしっかりとしておいてくださいね？）

「分かってるよ」

シアと話しながら旅館へ帰る。フェイトがいるってことは探<sup>ジュエルシード</sup>し物がこのあたりにあるはず。さて、いつ戦いが起こるかな？

## 第七話（前）（後書き）

和麻「……………なあ、作者？」

作者「どした？」

和麻「なのはフラグが酷くね？このままだとなのは一直線だぞ？」

作者「まゝ今はフラグ立てれるのなのはとフェイトだけだし我慢しろ」

和麻「アリサたちは入れないのか？」

作者「入れてほしいのか？」

和麻「いや、違う！」

作者「うんうん、分かるよ。可愛かったもんね、浴衣姿」

和麻「だから違って！」

作者「だいじょぶ。彼女たちのフラグは立てるとするならA・Sからだから」

和麻「……………クソ作者が」

作者「はっはっはっ、リア充乙」

和麻「トレース、オン投影、開始」

作者「え．．．、ちよつ、ソレはやめ．．．」

和麻「問答無用！天地乖離す開闢の星！」  
エヌマ・エリシュ

作者「ぎゃあああああああ！？」

## アンケート（前書き）

話の途中で誠に申し訳ありませんが、アンケートにご協力お願いします。

## アンケート

おはこんばんにちわ、作者です。

突然で申し訳ありませんが、アンケートを取らせていただきたいと思います。

題は、「まったり行くか、さくさく行くか」です。

今現在、ゆつくりと原作に沿いつつオリジナルを入れたりしているのですが、チート主人公の割には暴れてないな〜と思っています。なので、今回のアンケートは・・・

1・ゆつくりまったり原作に沿って行って欲しい

2・ちょこちょこ飛ばしつつ、さくつと最終決戦まで行って欲しい

のどちらかをお願いします。

期限はとりあえず今週中ということにさせていただきます。たくさん  
の意見が来てくれると嬉しいです。

それでは、どうかよろしくお願いいたします。

## 第七話（後）（前書き）

作「orz」

和「なにいきなり落ち込んでんだよ」

作「いや、俺にはことごとく文才ないな」と思って」

和「まあ、いまさら～な感じもするが」

作「戦闘とキャラの心理描写が苦手すぎる」

和「じゃあお前には何が書けるんだ、と小一時間くらい問い詰めた  
い」

作「今回もグダグダと書きちゃって長くなっちゃったし」

和「ダメ作者」

作「orz」

和「作者ダウンしたな。では、相変わらずグダグダですが、どうぞ」

## 第七話（後）

S i d e    フェイト

今回のジュエルシードは温泉街の外れの森にあった。温泉へ行くア  
ルフと別れて、私は一人ジュエルシードの位置を特定するために木  
の上で精神を集中していた。彼が来るまでは……

「おゝい、フェイトゝ？」

誰かが呼んでいる？私は声が聞こえたほうに視線を向ける。あれ？  
見たことある人だな。確か……

「和麻？」

たしかそんな名前だったはず。

「おお、覚えててくれたか。久しぶりだな。ジュエルシードか？」

嘘をつく必要もないので頷く。あれ？なんで悶えてるんだろ？あ、  
戻った。

「そつか。ま、健康には気をつけろよ。じゃあなゝ」

それだけ言って踵を返した。和麻がいるってことはなのはもいるの  
かな？ちよつと聞いてみないと。

「あの、フェイト？放してくれると嬉しいんだけど」



とりあえず木から下りて、和麻の服の端をつかむ。あれ？この服、いつもとはちよつと違う？まあ、いいや。とりあえず聞くことを聞かないとね。

「和麻がいるってことは、なのはもいるんだよね？」

「ああ、いるよ？」

やっぱりいるんだ。じゃあまた戦闘になっちゃうのかな・・・。

「そう」

それだけ言って手を離れた。できれば戦いたくないな。

「じゃあ今度こそ行くわ。またな」

そう言つて彼は私の頭に乗せて撫でてきた。あ、気持ちいい・・・。

「どうした？顔が赤いけど？風邪か？やっぱり無理してるんじゃないのか？」

そう言われて初めて自分が真っ赤になっていたことに気付いた。あうう、恥ずかしいよう／＼／

「ッ！な、なんでもない！」

「そうか？フェイトがそう言うならいいけど・・・。んじゃ、またな」

「・・・うん」

本当はもうちょっと撫でてほしかったな・・・／＼。はっ！わ、私っては何を！？と、とにかくジュエルシードの場所を見つけないと！あうう、集中できないよ。」

「フェイト、見つかったかい」

「ア、アルフ！？」

「どうしたんだい？」

「う、ううん。なんでもないよ」

「フェイトがそう言うならいいけど・・・。それよりジュエルシードは見つかったかい？」

「うん、だいぶ特定できたよ。今夜には捕獲できると思うよ」

「ナイスだよフェイト！さっすがあたしのご主人様」

「ありがとう、アルフ」

例え何があっても、ジュエルシードだけは譲れない。そう、絶対に。

俺が散歩から帰ってきたときには、すでに夕食の時間となっていた。

「和麻くん、こっちこっち!」

なのはが手を思いつきりブンブン振っている。どうやら隣に座って欲しいらしい。

「あゝ、分かった分かった」

やれやれといった表情を浮かべて、なのはの隣に座る。夕食は中規模の広間を貸し切って使っている。料理もお膳で出てくるし、まるで修学旅行だな。

「まあ、遅いよ!どこ行ってたの?」

「近くの森。空気が澄んでて美味しかったぞ?」

「へえ、和麻って森林浴とかするんだ」

「こういう時だけだな」

「でも、気持ちいいよね、森林浴って。私もたまにしてるよ?」

「すずかも?まあ、すずかは分かるけど和麻は意外よね……」

「俺の扱い酷くない!？」

「にははは」

「なのもフォローとかしてよ!？」

「はいはい、いつまでもバカやってないで食べましょう?」

「お前のせいだろうがあああああ!!!」

と、ぎゃあぎゃあ騒ぎながらも楽しく食事をしましたとき。・・・  
・これで何事もなく終わってくれてたらよかったんだけどねえ・・・  
・。。。

「ふにゃ〜、かあずうまあく〜ん?」

「・・・どうしてこうなった。」

「おい!なのは、しっかりしろ!ってかこっちの飲み物に酒混ぜたの誰だよ!？」

「いいじゃない、ちょっとくらい。ねえ、お母さん?」

「そうねえ。ちょっとくらいならいいんじゃないかしら？」

ダメだこの人達。速くなんとかしないと・・・。

「はあ・・・。士郎さん、なのはを連れて先に部屋に戻ってますね」

「わかった。ただし、なのはに手を出したら・・・分かってるよね？」

「わ、分かってますって！出すわけないでしょう！？」

「なに！？なのはには手を出すほどの魅力が無いとでも言うのか！」

あ、頭が痛くなってきたよコンチクショウ・・・。

迫り来る士郎さんと恭也さん（途中参戦してきた）を回避しつつ部屋へと向かう俺だった。・・・泣いていいよね？

「あゝ、疲れたあゝ！」

（お疲れ様です、マスター）

なのはは運んでる途中で寝ちゃったので、敷いてあった布団に寝かせておいた。ユーノ？まだアリサに玩具にされてるよ？

「こんなんで大丈夫かね？フェイトもいたから近くにジュエルシ

「ドがあるんだろうし」

（なのはさんが寝ている時にジュエルシールドが発動したらどうしますか？）

「そのときは俺が行くよ。鍛錬を兼ねて、な」

（手加減してあげてくださいね？）

「むしろ俺がされる側かも知れないけどな」

（それはそれで面白いですね。見てる分には）

「うるさいよ！？たく、俺の気も知らないで」

（私はマスターではありませんからね。分からないのも当然です）

「揚げ足取りに来た！？まあいいか、しばらく寝るから何かあったら起こしてくれ」

（了解しました。良い夢を、マスター）

一番端の布団に潜り込む。あ、眠気が……。ふああ……。。

（ ター！ ）

・・・ん？誰だ？

（ スター！ ）

あれ？これなんか前にもあったような・・・？デジャヴ？

（ マスター！ ）

「うおっ！」

（ シッ、静かに。 みなさんまだ寝てるんですから ）

（ ああ、悪い。 んで、何があった？ ）

何があった？なんて聞いているが、聞かなくてもわかる。だってジュエルシードの魔力感じるし。

（ 既にお気づきと思いますが、ジュエルシードです ）

ほらね？

（ 場所の特定は？ ）

（ 先ほど行った森の中です。 ちなみになのはさんはまだダウン中です ）

（やっぱりか。じゃあ行きますかねえ）

（見逃す、という手もあるのではないのですか？）

（俺はそれでもいいけどさ。もしなのはが知ったら、被害にあうのは俺だからな）

（マスター、苦勞してますね）

（まあな。さて、行くぞ）

（了解）

S i d e    フェイト

「うつはあゝ、すごいねこりや。これがロストログアのパワーってやつ？」

「ずいぶん不完全で、不安定な状態だけだね」

「あんたのお母さんはなんであんなもの、欲しがるんだろうっねえ？」

「さあ？分からないけど、母さんが欲しがってるんだから、手に入



れないと。バルディッシュ、起きて」

《イエス、サー》

バルディッシュを待機状態からシーリングフォームへと変化させる。後は封印するだけだ。……でも、あの子出てこなかったな。どうしたんだろ？

《シーリングモード、セットアップ》

「封印するよ。アルフ、サポートして」

「へいへい」

そのままジュエルシールドを封印する。これで、二つ目……。

封印して安心していると、足音が聞こえた。もしかしてなのは？そう思い音のした方を見ると……。そこには、ちよつと前にあったばかりの彼が、そこに立っていた。

S i d e   o u t

（ジュエルシールドの位置は、森を抜けた先にある川です）

「了解。一気に突っ切る」

言われた通りに、森を抜ける。その先の川、具体的には川に架かる橋の上にジュエルシードを持つフェイトと協力者と思われる女性はいた。

「フェイト！」

「和麻？どうしてここに？」

「なのはの代理だ。あいつは今ちよつと動けないんでな」

「そう」

「なあ、フェイト。どうしてそんなものジュエルシードなんか集めるんだ？」

「それは、「フェイト！こんな奴に言わなくていいよ！」アルフ・・」

ちつ、せつかく真意が聞き出せると思ったのに。いいところで邪魔しやがって。

「おい、誰だか知らないが、俺はフェイトと話をしてるんだ。邪魔するな」

「あたしはアルフ。フェイトの使い魔だ。悪いけど邪魔させてもらうよ」

そう言うと、その女性は大アルフきな狼へと姿を変えた。さすが魔法、なんでもアリだな。

「ジュエルシードを置いて引いてくれ、と言っても聞いてくれない

よな」

「当たり前だよ！はいそうですかって引き下がれるわけないだろ！」

「まあそつだよな。じゃあ賭けをしないか？」

「賭け？」

お、フェイトが乗ってきた。

「そつだ。本当はお互いのジュエルシード1つってのがいいんだろ  
うけど、俺持ってないから・・・そつだな。勝負をして、俺が勝  
つたらそのジュエルシードを渡してもらう。そして、フェイトが勝  
つたら・・・」

「私が勝つたら？」

「俺は出来る限りの範囲でフェイトの手伝いをする」

「そんな条件受け入れられるわけ」分かった」フェイト！？」

「その賭け、受けてもいい。でも、ちゃんと約束、守ってもらうか  
ら」

「分かった、ちゃんと守るよ。それと・・・アルフと言ったな。  
お前はどつする？2vs1でも構わんが？」

「その言葉、後悔するんじゃないよ？」

その言葉を聞いて、バルディッシュを構えるフェイト。

（マスター、どうするんですか？あんな大口をたたいて）

（シアは複写眼の発動と維持、フェイトの魔法のキャプチャーと解析を頼む）

（了解。レンはお使いになりますか？）

（いや、いい。投影でどうにかするよ。レンには魔法のサポートをさせてくれ）

（分かりました。……ですが、いつもより制御に注意してくださいね？レンは制御が少し苦手ですから）

（ん、分かった。気をつけておくよ。ってことで頼むよ、レン？）

（やっと出番かい？忘れられてるのかと思ったよ）

（悪い悪い。んじゃあ頼むよ、二人とも）

（（<sup>イエス、マイロード</sup>仰せのままに、我が主））

「さあ、始めようか！」

「投影、開始」

手にするのは人造の武器ではなく、星に鍛えられた神造兵装。人々の“こうであって欲しい”という想念が地上に蓄えられ、星の内部で結晶・精錬された“最強の幻想”ラストファンタズム。

その名は『エクスカリバー約束された勝利の剣』

「はぁあああ!!」

アルフが突進してくる。その後ろからフェイトがデバイスを構えて続く。アルフは囁か？

「くっ!!」

アルフの拳を首を右に曲げて辛うじてかわす。とりあえずはコイツからだ!

『スネーク、まずCQCの基本を思い出して……』

?なんか電波が飛んできたな。そのセリフは某蛇の人宛てだろうに。まあ、いい。せっかくの電波だ。ちよつと試してみよう。

投影したエクスカリバーを左手に逆手で持ち、殴アルフつてきた相手の手首を右手でつかみ、肘で顎を下から強打する。さらにエクスカリバーを逆手で持っている左手でさつき右手でつかんでいた手首を掴み直し、右手は胸倉を掴んで腰に力を入れ一本背負い。先の顎への一撃で反応に遅れたアルフは、受身も取れずに地面にたたきつけられる。自分でやつといてなんだが、とても痛そうである。

しかしこうも綺麗に決まるとは思ってもいなかった。電波よありがとう！

「……凄い」

フェイトがぼーんとしている。そりゃ仕方がないな。まさか、自分の使い魔であるアルフがこうもあっさりと一撃をくらうなんて想像してなかっただろうし。

「まずは一匹つてね」

逆手に持っていたエクスカリバーを正眼に構え直す。ここからは気合を入れないと負ける。いくらチートでも、剣の扱いなんて素人だから。短く息を吐いて、緊張をほぐす。大丈夫、いける。

「じゃあフェイト、行くぞ！」

「………負けない」

そうして、戦いの幕は上げられた。

「フォトンランサー、ファイア！」

黄色の魔力弾が雨あられと飛んでくる。

「ッ！これくらいなら行ける！」

直撃コースの魔力弾だけを切り落として、フェイトに肉薄する。そのまま右から袈裟斬りを狙う。が、サイスフォームのバルディッシュに阻まれる。そのまま二人は弾かれるようにバックステップで距離をとる。

「ちよつと油断してた」

「そうかよ」

隙を見せないように構える二人。一見すると、宝具を持つ和麻が圧倒的に有利に見えるが、今回はそうでもなかった。エクスカリ『約束された勝利の剣』を使用するには、かなりの魔力が必要である。が、現在和麻はリミッターをかけて魔力をAまで落としているため、一回使用するだけで魔力がほぼ空になってしまう。そんな訳で、和麻は純粋な剣術だけで戦わざるをえないのである。

はあ……。リミッター解除しとけばよかったかな。

……。ポチャン

「ッ！」

どこからともなく聞こえてきた水滴が落ちる音。それを合図に二人は加速する。

「はああああああ！」

フェイトが上段からサイスフォームのバルディッシュを振るう。俺は下から捌き上げるように剣を振って迎撃する。

キーン！

金属音を響かせぶつかり合う武器。俺は鏖兢り合いの状態から一歩引く。力を込めていたところの抵抗が急に無くなり、バランスを崩すフェイト。

「くっ！」

「もらった！」

（ツ！マスター！いけません、下がって！）

再び下から捌き上げるような軌道で、バルディッシュを上弾き飛ばす。勝った。俺はそう思った。シアの叫びも気にも留めな

かった。だが、この時俺は1つ忘れていたことがあった。……

そう、これは剣道などではなく、魔導師の戦いだということを。

「私の勝ち」

野球で言うフルスイングをした状態の俺は、自分のまわりに浮かぶ待機状態の魔力弾を見て、自分が敗北したのを悟ったのだった。

フットランサー



「俺の負けか」

「約束、守ってもらう」

「わーってるよ。じゃあ俺はそろそろ宿に戻るな。何かあったら連絡してくれ」

戦闘した後だからものすつごく眠い。気を抜いたらポロツ・・・じゃないコテツといきそうだ。帰って寝よ寝よ。

「分かった。アルフ、行くよ」

フェイトの隣にはいつの間にか復活したアルフがいた。うわ、あの眼ぜってー俺のこと信用してない眼だ。まあ、仕方ないことだが。

「じゃあ、お休み。体につけろよ」

「うん、お休み」

それだけ言うと、俺は宿の方へと足を向けた。

S i d e      フェイト

「フェイト、あいつはどうするんだい？」

「もちろん協力してもらうよ。でも、あの<sup>なのは</sup>子にバレないようにしな

いといけないからしばらくは今のままかな」

「本当に大丈夫なのか？あたしは信用できないけどねえ」

「大丈夫。そんなことをする人じゃないよ」

「へえ、ずいぶんアイツの肩を持つんだね？もしかして……………」

「べ、別に和麻のことは何とも思っていないよ！？／／／」

た、確かに優しいしかっこいいなあとは思っけど…………／／／／  
／。って、私ってば何考えてるの！？

「そういう割には顔が真っ赤だよ、フェイト？（ニヤニヤ）」

「ち、違っつてば！」

うう…………恥ずかしい／／／

「まあ、フェイトが言っんなら仕方ないか。じゃあ帰ろう、フェイト」

「うん」

これで少しはジュエルシード探しが楽になるはず。はやく母さんの喜ぶ顔が見たいな。

S i d e o u t

「あゝあ、負けちまったか。ごめんな、シア。あの時お前の言うつ  
おり下がっておけばよかった」

（いえ、それは違います。私がもっと早く気づいていれば……）

「いやいや、俺が」

（いえ、私が）

「俺が」

（私が）

「……やめよう、余りにも不毛すぎる」

（そうですね。今回の敗北は授業料ということにしましょう）

「ずいぶん高い授業料だったけどな」

（ですが、もう二度とあんな戦負け戦いはしないでしょう？）

「そうだな」

（今度は、勝てるでしょう？）

「当然。次は負けねえよ」

（それでこそ我が主です。さて、急いで宿へ戻りましょう。余り遅くなると誰かに気づかれますよ）

「ん、了解。トレース、アウト 投影、破棄」

今まで持ちっぱなしだった剣を消す。こんなん持ってうろろろしてたら一発で捕まるからな。

「あ、そういえばキャプチャーうまくいった？」

（はい、フォトンランサーだけですが、うまく行きました。改良しますか？）

「ん、宿まで暇だしやるっかな」

（了解しました。複写眼を起動させます）

俺は歩きながら、魔法の改良を行うという器用なことをしながら、一路宿を目指した。

（……そういえば、フェイトさんとの約束ってなのはさんへの裏切りになりませんか？）

「げ……」

（うまく立ち回らないと大変なことになりますね）

「・・・・・・・・どうにかしてバレないように動くしかないな」

くそっ、また厄事が増えたよちくせう。

## 第七話（後）（後書き）

作「まずはアンケートの結果から」

和「了解。アメリカ様、ソラト様、某スーパーコーディネーター様、アンケートの御協力誠にありがとうございました」

作「結果は1の『ゆっくりまったり原作に沿って行く』となりました！」

和「あくまで原作に沿う、だからオリジナル展開はいれるのか」

作「まあね。それと、某スーパーコーディネーター様から贈り物が届いてます」

和「お！なにになに！？」

作「太陽銃ガン・デル・ソル、暗黒銃ガン・デル・ヘル。それとデバイスとしてソル・デバイスを頂きましたー！」

和「ボクタイかよ！？」

作「某スーパーコーディネーター様、ありがとうございます。のちのち使うと思いますので、無限の剣製の中に納めさせていただきます」

和「固有結界は押入れじゃねえ！」

作「うるさい！じゃあ持つてろ！」

和「こ、これは！太陽おおおおおおお！！」

作「うるせえ！」

和「すまん、つい……」

作「某蛇の人が「太陽おおお！」って戦場で叫んでるの思い出すからヤメレ」

和「それ4だろ！」

作「話が脱線しまくりだろうが！」

和「お前の所為だろ！」

作「ゴホン、えー、そんなわけでこれからも応援よろしくお願いいたします」

和「御意見などありましたらお知らせください」

作・和「それでは、また次回！」

## 第八話（前書き）

久しぶりの投稿です！

時間が無い＋ネタがないの二重苦で更新が遅れました。誠に申し訳ありません。

なお、眠いのをガマンして変なテンションで書いてしまったのでおかしいところがあるかも知れませんが、もし見つけた場合はお知らせください。

それでは、どうぞ。

変更点

・「・・・」を「…」にしてみました。

・デバイスの発言を一部英語表記にいたしました。（簡単なものだけ）



## 第八話

夜に染まる街のとあるビルの屋上。そこに漆黒のバリアジャケットを纏った一人の少女が佇んでいた。彼女の隣には、妙齡の女性が暇そうにしながら座っている。時折、少女を見上げて何かを尋ねているようだが、少女は頭を振るばかりであつた。2、3時間経った頃、少女は落胆した表情を浮かべながら、女性は少女を慰めながら、その場から姿を消した。

温泉旅行から帰ってきて数日が経った。温泉での一件以来、ジュエルシードの反応は無く、フェイトからの連絡もない穏やかな日々だった。

「なのは。朝だぞ、起きろ！」

「うにゃ、後五分……」

ピクツと俺の顔に青筋が立つ。

「いいから……起きろやあああああ！！」

「ふにゃあああああ！？」

朝から騒がしい高町家であった。

一日はあつと言う間に過ぎ去り、夜。時刻は午前二時、丑三つ時と呼ばれる時間である。

（マスター、起きてください！）

（…んあ？にやにごと？）

（寝ボケてる場合じゃありません！ジュエルシードの反応です！）

（…んあゝ、久しぶりの反応だね。で、今何時？）

（午前二時ちょうどです、マスター）

（……ゴメン。今回パスで）

（ちょ、マスター！なに言っちゃってんですか！？早く封印しないと……）

（だ、だって二時だよ！？丑三つ時だよ！？お化けとかでるかも知れないじゃん！？）

そう、俺は小さい頃からお化けの類が大の苦手なのだ。怪談とかも分も聞いてられん。

（くっ、ちょっとマスターが可愛いと思ってしまった自分が憎らしいです……………）

（？何言ってるんだ？）

（なんでもありません！ほら、早く行きますよ！）

（えゝ。もう、しょうがないなあ…………）

結局、押し切られて封印に向かうことになってしまった。デバイスに負ける俺って…………。

（じゃあ、とりあえずバリアジャケット展開して飛んで行こうか。どうせフェイトもいるだろうし）

（了解。…そういえばマスター、バリアジャケット着るの久しぶりですね）

（そうだね…ってあれ？この前のフェイト戦の時着てなかったっけ？）

（何言ってるんですか？初めてお会いした時以来、ずっと使っていないじゃないですか）

（初めて会った時以来…ってええええええええええええ！？）

ここにきて衝撃の事実が発覚！俺は今まで一度しかバリアジャケットを展開していなかった！

（俺はてっきりオートで展開するのかと思ってたよ…………）

（そんな訳ないでしょう。次からは気をつけてくださいよ？）

（分かった。じゃあ、セットアップ！）

（《All right master》）

眩い光が俺を包み込む。その光が収まると、そこには黒地のTシャツに黒のジーパン、それに地面につきそうなほどの長さの黒いコートという、全身真っ黒な格好の俺が立っていた。

（黒子と間違えそうなほど真っ黒ですね。それにこの季節にコートは似合いませんよ？）

（うるさい！決めちまったものは仕方ないだろ？）

（ふふふ、ところがどっこい。何と、私はいつでもバリアジャケットを変えることができます！）

（おお、すげえ！さすが御都合主義だな。その話は空の上でしょうじゃないか）

（了解しました、マスター）

え？なのは？爆睡してたから置いて行っただよ？

「で、現場に着いた訳なんだが…」

（これは…）

俺の視線の先には、巨大化した花が咲いていた。例えるならラフレシアだな。それよりさらに大きいけど。ぶっちゃけ近寄りたくない。生理的にイヤだ。

（マスター、先客がいるみたいです）

「あゝ、フェイトだろ？あいつよくあんなのに攻撃できるよな」

（あの植物 仮にラフレシアとします の攻撃方法は根による  
攻撃と種子による攻撃の二種類ですね）

種子……？タ マシンガンみたいなもんか？

（それと……あそこから花粉のようなものが噴き出てますね。あ、  
フェイトさんが花粉の中に突っ込んで……）

花粉の中に突っ込んだフェイトは、バリアジャケットがところどころ溶けているという、とてもアダルティな格好になっていた。

「植物園の中だったただけマシか…？」

（ですね。ですので、遠距離からの攻撃をオススメします）

「だよねー。じゃあ最近作った魔法でも試してみるか。作成時間5分の」

（最後の5分で一気に不安になってきました）

作った俺も若干不安だが、まあ大丈夫だろう。……多分。

「よし、じゃあ…。（フェイト、聞こえるか？）」

（！ 和麻！？）

（おうよ。ところで今戦闘中だろ？）

（な、なんで知ってるの！？）

（だって今見てるし）

俺がここに来た時も全く気づいてなかったもんなあ。気づいたら何かしてくるはずだし。

（ええっ！？／／／／）

ん？フェイトがみるみる真っ赤になっていくな。まさか、さっきの花粉で！？

（おい、大丈夫か！？）

（ふえ！？う、うん。大丈夫だよ。それより……）

(それより?)

(それより……見た?)

見た…ってなんのことだ?

(? よくわからないんだが、見たって何のことだ?)

(ツ！な、なんでもないよ！なんでも！)

(?)

変なフェイトだな。っと、そんなことより

(フェイト、一回こっちまで下がれ！)

(ええっ！な、なんで…?)

(ここからあの植物野郎を地に沈めてやるのさ。だから早く下がれ)

(うう…、でもお…)

(どうしたんだ?)

なんかさっきから様子がおかしいな。やっぱりさっきの戦闘で怪我でもして動けないのか?

(フェイト、本当に大丈夫なのか?)

（だ、大丈夫だよ。だから（ハアゝイ、ちょっといいかしら？）ア、アルフ！？）

（アルフ？確か使い魔だったか？）

（御名答。それよりアンタ、アタシのご主人様に何してんだい？）

（何って退避を　　）

（アンタはフェイトに、あの恰好のまま退避しろって言うのかい？）

言われて気づいた。そういえばさっき花粉を浴びて際どい格好に……。ってうわ、なんてこと言ったださっきの俺！

（やっと気づいたようだね。アタシが言いたかったのはそれだけさ）

やっちまったよ、俺。最低だよ、俺。フェイトにも嫌われただろうな。ああ、何もかもがどうでもよくなって　　。

（マスター！？戻ってきてください！）

「うおっ！びつくりしたじゃないか！」

（マスターがぼーっとしてるからじゃないですか！）

ちよつとネガティブの世界に入ってしまったようだ。反省反省。

「ごめんごめん。で、フェイト達は？」



（既に退避できてます）

「ん、了解。じゃあ行くぞ」

俺はラフレシア（仮）に向けて、手を翳す。目標地点まで750mか。よし

「生者のために施しを。

死者のためには花束を。

戦友<sup>とも</sup>のために剣を持ち、

己が敵には死の制裁を。

しかして我ら

正義の列に加わらん。

ヒイラギ・カズマの名の下に、

この世の悪に鉄槌を」

詠唱を終え、翳していた手を上にゆっくりと揚げて勢いよく振り下ろす。すると

ドオオオオオン！！

身を裂くような激しい音とともに、巨大な雷<sup>いかづち</sup>がラフレシア（仮）に

降り注いだ。

「うん、なかなかの威力だな」

（感心してる場合かーッ！どうするんですか、あのクレーターは！？）

そう、ラフレシア（仮）を消し飛ばしたのはいいのだが、代わりに大きな穴が開いてしまった。威力間違えたかな…。

（マスターの新魔法を信じた私がバカでした……）

「ま、まあまあ。一応結界内だから大丈夫だつて」

（それでもです！ジュエルシードまで消し飛ばしてしまったらどうするんですか！）

爆心地のほうをチラッと見ると、フェイトが封印作業をしていた。  
クレーター  
よかった、さすがにジュエルシードまでは消し飛ばしていないみたいだ。

（マスター！ちゃんと聞いているんですか！？）

その後、数時間に渡ってシアのお説教は続き、気が付いたら空が白み始めていた。説教の念話がダダ漏れだったため、それを聞いたフェイトとアルフは迫力に負けて、お礼を言うこともできずに帰って行った。

そして、あの魔法は使用禁止にされてしまった。とほほ…。

「…ただいま」（ボソッ）」

「お帰り、和麻君…。どこに行ってたのかな、かな？」

窓から入ってきた俺を待ち受けていたのは、魔王だった。（誤字に非ず）

「あ、あはは……。お、おはよう、なのは。今日は早いんだね」

「うん。和麻君のおかげでね、とっても早く起きたんだよ？」

やべえ。笑顔のはずなのに寒気がとまんねえ。

「そ、そうか。そりゃよかったな」

「うん」

目だ。目が笑ってねえ。

「え、えっと、なのは？今日も学校があるんじゃないのか？」

「和麻君、今日は学校お休みなんだよ？」

こ、これはあれか？浮気がバレた時の雰囲気なのか！？

「そ、そうだったのか。なら、「言いたいことは、それだけ？」ひ  
iiiiiiii!？」

ま、待て。落ち着くんだ！そう、そうだ……。まずは状況確認だ。

正面：魔王降臨中  
なのは

右：窓

左：部屋のドア（数m先）

後ろ：壁

驚いた。状況を打破できそうなものが何もない。このままだと……。

「チェックメイトだね、和麻君」

「ま、待て。なのは、落ち着いてくれ！」

「ゆつくりO H A N A S H Iしよね、和麻君」

「くそつ、これが言葉のキャッチボールってヤツか！」「…レイジン  
グハート」《All right》って、待て！デバイスは反則だ  
ぎゃあああああ！」

見せられないよ！

「ひ、酷い目にあつた…」

「にはははは」

まさかデバイスで《ピーー》とか《ピーーッ》とか《ピーー  
ーッ！》とかされるとは思ってもみなかった。

「さすがにアレはやり過ぎだと思っただが？」

「だって、朝起きたら和麻君がいなかったんだもん…」

「理由を説明する前に襲われたらどうしようもないよな」

「うつ…。そ、それよりなんで今朝いなかったの？」

「逃げたな。…まあいい、説明してやるよ。」

明中                      というわけだ」

説

まあ、説明はめんどいので省りゃ…今手抜きつていった奴誰だ！出てこい！出てきて30秒で死ぬぜ？……………俺が。

「……はい、たくさんの「お前かよ！」突っ込みを頂きました。ありがとうございます。え？面白くない？ごめんなさいごめんなさい。だからその手に持ってるもの投げないでえ〜！」

「ん？なんかヘンな電波が…」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。それより、分かってもらえたか？」

「うん、私を放っておいて夜中にフェイトちゃんと会ってたんだよね。よく分かったよ」

目、目のハイライトが消えてやがる…。なんて威圧感だよ。震えがとまんねえ…。

「いや、待て。なにも分かってないだろ！」

「O S H I O K Iだよ、和麻君。覚悟はいい…？」

「全然よくないから！レイジングハートを置いて話し合おうじゃないか！ってシア！お前もなんか言えよ！」

（なのはちゃん…。殺るんならコイツだけをやりなさい！）

「ありがとう……って違う！お前もか！お前も敵なのか！？」

「そうだね。じゃあお望み通り和麻君だけにするよ」

「待ちやがれ！ってあれ？体が動かん。まさか、バインド！？屋内で！？」

「大丈夫だよ、和麻君。結界は張ってあるから」

「そうか、それなら安心……じゃない！オイ、その淫獣！見てないで助けやがれ！」

「きゅ、きゅ、きゅううううう（無理です。和麻さん、安らかに眠ってください）」

四面楚歌。まさかこの身で体験することになるとは…。

「デイベイイン……」

Divine  
神聖な？これってまさか……

《Divine buster》

「バスター……！！」

「ぎゃあああああああ！」

これからはなのはを怒らせないようにしよう。そう心に決めて、俺の意識は闇へと沈んでいった。





## 第八話（後書き）

どうも作者です。

今回は和麻が意識不明の為、私一人で進めさせていただきます。

今回のお話は完全オリジナルになりました。理由は簡単、原作を忘れたからです。

なので今から見直してこようと思います。

最後に、この小説を読んでくださる方、感想を下さる方に感謝を申し上げます。

それでは、また次回。

アディオス！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8091m/>

---

魔法少女リリカルなのは ～複製と複製のフェイカー～

2010年12月21日14時14分発行